たぷ友好会

夏のサンタクロース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
たぷ友好会

【Ｎコード】
Ｎ１３５５Ｄ

【作者名】
夏のサンタクロース

【あらすじ】
その昔、デブ二人を主として計六人でつくった伝説の『デブ友好会』という部活があったらしい。彼らは様々な事件に遭遇し、解決してきたという。一人の少年が彼らに憧れ、新たな部活をつくるとこから本編は始まる。仲間が増えてみんなでどたばたやっていく学園ライフです。

始まり編その1

【サッカー部…いきのいい一年生を募集中】

『サッカーかぁ、悪くねぇ。』

【卓球部…いまこそ君の人生を変える時】

『いまいちぱっとしねぇな。』

【たぷ友好会…部員募集中】

『…なんだこりゃ。』

ここはとある学校の掲示板。俺は光治、ピチピチの高校一年生だぜ。

今は放課後、そこで入る部活をさがしていたのだか…。

『たぷ友好会ってなんだ？』

『ふふふ、たぷ友好会に疑問を持ったね。』（？？？）

後ろにはメガネをかけたロン毛がたっていた。

『うわぁ、俺の背後によるな、誰だお前は？』（光治）

『僕？僕は裁薔明（さいばらあきら）。君とおんなじクラスの。自己紹介したじゃんか。』（明）

『ああ、そーゆうのもいたっけ！』（光治）

『それはひどいだろ…。とにかく、たぷ友好会の事を知りたいのならこれから理科室に来てくれ。』（明）

『いててて、とか言いながら引きずるんじゃねぇ。』（光治）

そして…理科室。

『で、いったいなんなんだ？たぷ友好会っつーのは？』（光治）

『実はこの部活僕が作ったんだ。』（明）

『はぁ？』（光治）

『一年でも部活は作れるんだよ。』（明）
『じゃなくて、なんでこんな変な部活を作ったのかときーてんだ。』（光治）
『昔、といっても十年ほど前、この部活の原型となるデブ友好会っていう伝説の部活があったんだ。彼らはいろんな事件に遭遇し、解決してきたと聞く。その続きをやりたくて作ったのが僕のたぷ友好会さ。』（明）
『ふーん、じゃ、俺もう行くわ。』（光治）
『ちょっと待てよ、話しはまだ途中だ。その彼らを越えてみたいと思わないかい。』（明）
『キョーミないね。』（光治）
ガララ、ピシャ。（戸を閉める音）
『……。』（明）

次の日の放課後、
―周りには誰もいない。光治は教室の机に顔を伏せていた。―
『…ＺＺＺ。』（光治）
ガバッ（起きた）
『ん～？、授業、寝過ごしちまったか。』（光治）
『こ・う・じ　君？』（？？？）
『うわぁ。』
ズーン（光治がいすからひっくり返った）
『てめぇ、明。俺の机の真下で何してやがる。』（光治）
『いやいや君をあきらめきれなくってね。』（明）

始まり編その１（後書き）

…すみません、早く復活したい為、「」から『』の変換は妥協します。

始まり編その２（前書き）

明は光治をたぷ友好会に誘う。
だが光治の明に対する態度は冷たいものだった。

始まり編その２

『しつけーな、入らねぇって言ったじゃねーか。』（光治）
『僕は君が入ると言うまでどんなことでもしてみせる。』（明）
『言ったな。じゃあ、俺に彼女をつくるってーのはどーだ？できたらたぷ友好会に入ってやってもいい。』（光治）
『難問だなぁ。考えてみるよ。』（明）
…どーせ無理だろ。（光治）
次の日の朝、
『光治君、これで完璧だ。』（明）
『なんのことだ？』（光治）
『ほら、君の彼女をつくるっむごむご（途中で口を押さえられた）』（明）

（（）←これはひそひそ話の時に使うことにします。）

『（バカっ、声がでかい。聞こえるだろ。…まだそんな事考えていたのか？）
で、どーすんだ？』（光治）
『名付けて、ラブレター、百うちゃ当たる、大作戦。』（明）
『まさか、ラブレターを手当たり次第女子のくつ箱にいれるっつーくっだらねぇ作戦じゃねーだろうな。』（光治）
『ギックゥ。は…はは。』（明）
『やっぱりな。そんなことしてられるか！』（光治）
『１０通ぐらい作ってきたんだけどなぁ。…ダメか。じゃあ、次の作戦にいこうか。』（明）
『次のって、まだあんのかよ。』（光治）
『次のは８０％成功するはずだ。』（明）
『マジか！』（光治）

『なんだ、けっこうノリ気じゃんか。』（明）
『あっ、いや……。おっほん（せきばらい）、で、次はどーするんだ？』（光治）
『君はどうしてモテる人はモテて、モテない人はモテないんだと思う？』（明）
『そりゃーやっぱ、デリカシーのない奴は嫌われるだろーし、ずば抜けている奴はモテるんじゃねーか？』（光治）
『確かにそれも要員のひとつとして考えられる。が、僕の考えた最終定理はかわいい、だ。』（明）
『か、カワイイ？』（光治）
『そう、かわいい。モテる奴とモテない奴の違いはそこにあるんだよ。ずば抜けている奴は確かにモテる、でもそれはかわいい、のひとつ下のランクでの話だ。かわいくない奴、つまり素っ気ない奴とかは嫌われる、かわいい奴、つまり何気ない親切さとかをもっている奴や顔がかわいい奴はモテる。これで全て説明がつくんだよ。』（明）
『なるほど、非常に単純だが正論のような気がしてきた』（光治）
『そう、単純なものほど理屈がない分、厄介なんだよ。今回の作戦はそこを利用するというわけさ。』（明）

始まり編その３（前書き）

『俺に彼女をつくれたら入ってやってもいい。』
と、無理難題を押し付ける光治。
この難問に明は！？

始まり編その３

『次なる作戦名はかわいい物でＧＯ！ゴＧＯ！大作戦。』（明）
『…前から思ってたけど、お前、ネーミングセンスねーのな。』（光治）
『ほっといてくれ！』（明）

…そして学校の裏、
…『なんだこれは？』（光治）
『うん、よく似合ってるよ。』（明）
『なんで俺がこんなかわいいニワトリの着ぐるみなんぞ着にゃあならんのだ。（もう着ている）』（光治）
『これを着てみんなの前に出た君はもってモテ。』（明）
『っなわけあるかー！』（光治）
『…やっぱり無理かなぁ。』（明）
『ったりめーだ！（紅潮）』（光治）
『あ、あれ光治と明君じゃなーい？』（？？？）
（学校の裏に女子がきた）
『あ、本当だ、光治ー、似合ってるよー。うぷぷ。』（？？？）
タッタッタッタッ。（どっか行った。）

『最初に話しかけたのはクラスメイトのあずささんだよねー。もう一人は光治君の友達かい？』（明）
『あ、あいつは…。あいつもクラスメイトだよ。俺の幼なじみである舞だ。よりに、よってあいつに見られるとは。あいつはしゃべり屋で明日はこの話で持ち切りになるぞ。』（光治）
『ありゃー。それはご愁傷様。』（明）
『あ～きぃ～らぁ～。（怨）』（光治）

（逃げた明）
『待てっ、このっ。（ニワトリスーツを着たまま追いかけています。）』（光治）

そして明日の放課後、
『ねぇ、ねぇ、昨日は何してたの？』（舞）
『なんでもねぇよ。なんでお前こそ学校の裏なんかにきたんだよ。』（光治）
『だって、あたし、植物係だもん。裏にもあるじゃん。』（舞）
…（ぐしゃぐしゃ）↑（頭の中）ちっ、運がわりぃ。
『ところで舞さんたぷ友好会に入らないかい？』（明）
『何それ、部活？』（舞）
『うん。』（明）
『…あたし毎日忙しいから。たまにならきてもいいよ。』（舞）
『やったあ。これで三人目だ。』（明）
『俺はまだ入ってねーよ。（ツッコミ）』（光治）
『ふふ。面白そうだし、たまになら…ね。』（舞）

…そして
『で、次はどーすんだ？』（光治）
『う～ん、君に彼女をつくるっていうのは想像以上に難しいなぁ。他に願いはないのかい？』（明）
『そうだなぁ、俺にテストで平均８０点以上とらせるっつーのはどーだ？』（光治）『いいよ。』（明）
『明君、家庭教師できんの？』（舞）
『いや、そういうわけじゃあないんだけど…』（明）

始まり編その４

『まあ、教えられたとしてもこいつに８０点以上とらせるなんて無理ね。だってこいつ、頭にかなりがつくほどの単細胞だもん。』（舞）

『おい……。』（光治）

『まあまあ、僕に任せといてよ。』（明）

…テスト一週間前、学校の放課後にて

『で、どーやって俺にテストで平均８０点以上とらせる気だよ。まだ何にもしてねぇじゃん。』（光治）

『いまからいまから♪明日には答がでるよ。』（明）

『…？？？』（光治）

その日の夜、

カタ…カタカタ。（パソコンのキーを押す音）

『フフフ、これで…。』（？？？）

カタ。（ボタンを押す音）

ブー、ブー、ブー（パソコンの画面から）

『くっ、なんで…。やはり外部のパソコンからはアクセス不可か。』（？？？）

次の日、

『で、どうなったんだよ、お前の作戦は？』（光治）

『ああ、ゴメン、あと一日待って。五日でも十分間に合うからさ！』（明）

『？？？』（光治）

その日の夜、学校の中、夜ひっそりと動きだすひとつの影が…。

『ふー、閉門まで待ってたかいがあったよ。（トイレで）』（？？？）
（もう学校には誰もいません。）
…パソコン室
カタ…カタカタ
『今度こそ！』
カタ。
ブーブーブー（パソコン画面からの音）
『パスワード？何故だ？あっ、そうかソフトをいれ忘れた。』
ウィーン（ソフトをいれる音）
『これでどうだ！』
カタ。ピンポーン（パソコン画面からの音）
『よし、つながった。これでメインコンピューターからの情報を自由にやりとりできるぞ。』
カタ…カタカタ。
そして…
『よし、これで完了。これで光治君は８０点以上とれるぞ。…おっと、このままじゃあ、使用記録が残っちまう。消去してっと。』
カタ。
『これで良し。』

そして翌日の朝。（学校で）『おーい、光治くーん。』（明）
『おう、明。どうした？（早弁（当）中）』（光治）
『どうした？じゃないよ。はい、これ。』（明）
明は光治にＡ４プリント数まいを手渡した。
『何これ？』（光治）
『テストの答えだよ。』（明）
『は？…マジで？お前って何者？』（光治）
『僕はパソコンに関してはプロ級だと自負してるからね。このくらいわけないよ。』（明）

『…お前ってすごい奴だったんだな。とにかくサンキュー。これで平均１００点も夢じゃねーぜ。』（光治）

『…そんなことしたら疑われないかい？』（明）

始まり編その5

『次回もおんなじ方法で～。』（光治）
『ダメだ。いくらなんでも何回もしてたら学校側も気ずくよ。続けるには異なる方法でなんどもアクセスしなきゃならないといけなくなる。それはとても大変なんだ。それにもうこんな卑怯なことはしたくないしね。』（明）
『チッ。』（光治）

…そしてテストが返ってきた。
『光治ー、平均何点だった？』（舞）
『…７５点』（光治）
『アハハハハ、やっぱりね。』（舞）
明がきた。
『光治君、何点だった？』（明）
『７５点。』（舞）
『そんなバカな…。』（明）
『だから言ったのよ、光治に平均８０は無理だってね。覚えること自体苦手なんだから。』（舞）
『……。（ぱくぱく）↑（口ぱく）（ショックで口もきけない）』（光治）
『…ここまでだったとは。計算外だ。（床に両手をついて）』（明）

…そして放課後、屋上で
『あきらぁ、８０、いかなかったじゃねーかよ。（両腕を鉄柵にかけている）』（光治）
『僕は全力を尽くしたよ。あれは君の問題だろ？』（明）
『はぁ～、へこむ。』（光治）
『他に願いは？』（明）

『もうどうでもよくなってきたなぁ。そうだなぁ、あるとすれば、デブ友好会というくだらない部活に入ったメンバーのうちの誰かと会ってみたくなったなぁ。』（光治）
『なんだ、はじめからそう言ってくれればよかったのに。』（明）
『あてがあるのか？』（光治）
『任せといてよ。』（明）

…そして、三日後、（学校で）
『光治君、アポとれたよ。今週の日曜日、夜７時、居酒屋のＫａｌｕｋｕにて』（明）
『マジで？どうやってとれたんだよ？』（光治）
『フフフ…それはまぁ、当日のお楽しみってことで。』（明）
『はぁ？』（光治）
…そして当日、
カランカラン、（↑鈴の音）（戸を開ける音）
『待ち合わせ場所はカルクの２―３の部屋って言ってたな。』（光治）
…そして
『…ここか。』（光治）
ガラッ。（戸を開ける音）
大人達が光治を見た。
…明はいねーな。
『失礼しました。』（光治）
と、その時後ろから誰かが来た。
『やっ。』（明）
『明！』（光治）
『ここでいいんだよ。』（明）
『（ってことはこの人達がデブ友好会のメンバー？）
光治は辺りを見まわした
（…ってデブじゃねーじゃん。）』（光治）

始まり編その6

『（…やせたんじゃないかい？それにデブ友好会のメンバーだからってデブとは限らないよ。たぷ友好会だってたぷたぷな奴を集めてるわけじゃあないんだから。）』（明）
『何話してんだよ。』（ケント）
『ああ、紹介します。こちらが光治君です。』（明）
光治に向かって
『この方はケントさんだよ。僕の親戚なんだ。』（明）
『なるほど、そーゆうことか。』（光治）
『ここにいる元デブ友好会のメンバーの方々は今日、君のためにケントさんをとおして集まってくれたんだ。』（明）
『へぇ～。』（光治）

『こいつがデブ友好会のあとを継ぐというからつい嬉しくてなってな、集まったってわけだ。』（ケント）
『俺はデブ友好会に入るってゆう物好きを見に来ただけだけどね。』（僕）
『またまた、今日を楽しみにしてたくせに。』（由香）
『うそはダメだな。』（クリフ）
『そうですよ。久方ぶりの同窓会なんですから』（あしべ）
『君が光治君か、話は聞いてるよ。』（大地）
『やだっ、美形じゃない。』（由香）
『あっ、いや。（照れてる）』（光治）
『おばさんのくせに。』（ケント）
由香はケントの腕をつねった。
『いててて。』（ケント）

…そして俺らはずっと話しあった。母親に登校拒否させられていた

子を登校させたこと、明が俺をたぷ友好会にいれようとしていろいろ尽くしてくれたこと、きもだめしをしてたまたま殺人犯に遭遇して戦い、今一歩のところで逃げられてしまったこと。他にもいろいろ。

…そして帰りのこと

『はぁ～、デブ友好会ってけっこうすごいんだな。』（光治）

『でしょ？彼等に憧れて僕はたぷ友好会をつくったんだ。』（明）

『いいぜ。』（光治）

『えっ！』（明）

『たぷ友好会に入っても。』（光治）

『やったあ。』（明）

こうして彼らは奇妙奇天烈摩訶不思議な、本人達でさえ何をするか分からない部活を作ることとなった。彼らの『伝説』（ものがたり）は、これから始まる。

広梳編その１（前書き）

始めはたぷ友好会に全く興味のない光治を明の努力により、なんとかたぷ友好会に入れることに成功した。

広梳編その1

『……ありがとう。でも人間には迷惑をかけられない。（時計を見て）もう行かなくちゃ』（コロポックル）
『まて、行くな…。…おい。…俺も……一緒に…。』ガバッ。（起きた）
『はっ。夢か。何だったんだ。』（光治）

…そして学校。
『ねえねえ、知ってる？』（舞）
『何をだよ。』（光治）
『今日、転校生がくるんだって。』（舞）
『ああ、それなら僕もきいたよ。ところどころで問題を起こしてまわってる超問題児だってね。』（明）
『そうそう。なんでも前の学校じゃあ、校舎を全焼させたって。』（舞）

『その前の学校じゃあ、先生達の財布の金を盗んでいったとか。うわさはいろいろあるけど、全てやり方が巧妙で犯人は特定できないんだ。ただ、彼だといううわさだけで。』（明）
『へぇ～とにかくすげぇ奴なんだな。ん？おっともうこんな時間だ。全校朝会始まるぜ。』（光治）

…そして全校朝会。
がやがや。（騒音）
『（マイクで）お静かに。今から転校生を紹介します。え～と、彼は普通科普通コースの1年A組の…』（教頭）
転校生は教頭からマイクをとった。
『城戸（きど）　広梳（こうすけ）です。よろしく。』

髪は茶髪…というよりオレンジで、首すじまであり、ゆってある。
そしてなにより女の人のようにキレイな人だった。
『広梳！？』（光治）
『あれが転校生か…。みるからにワルだね。しかもうちのクラスじゃんか。』（明）
…まさか。
『ん？どうかしたのかい？』（明）

…そして教室。
『改めて紹介します。城戸広梳君です。』（担任）
『城戸広梳です。』（広梳）
『広梳！』（光治）
ガタッ。（いきなり席を立つとなるあの音）
『光…治？』（広梳）
『広梳じゃんか。いつこっちに来たんだ？』（光治）

『昨日だよ。フッ、まさかお前がいたとはな。』（広梳）
『はいはい、二人ともそこらへんにして席に座りなさい。』（担任）

…そして放課後、
『広梳ー。』（光治）
『ん？なんだ？』（広梳）
『お前、たぶ友好会に入らねぇ？』（光治）
『なんだそれ？』（広梳）
『……ということなんだ。』（光治）
『まってよ。私は反対よ。』（舞）
『僕も』（明）
『どうやら入れないみたいだな。』（広梳）
そうして広梳は帰った。

『なんでだよ。』（光治）
『だってあんなワルいれられないじゃなーい。』（舞）

広梳編その2

『そうだよ。それにとても危険な人だ。関わっていたら僕らにも被害が及ぶ。』（明）
『あいつは…ゼッテーそんな奴じゃねーって、かならず理由があるはずなんだ。』（光治）
『……』（明）
『……』（舞）
『…ちっ、わかったよ。』（光治）

…そして。帰り道の使われていないボロアパートの辺りで。
『ん？あれは…広梳？』（光治）
広梳はボロアパートの鍵を開けて入っていった。
『？？？、あそこが広梳の家…っつーわけじゃあなさそうだな。』（光治）
光治は広梳が入っていった部屋の前まで行った。
ガチャガチャ（ドアノブをまわす音）
…鍵！？
ドアの内側から声が聞こえる。
『なんだ！？、おい3、ちょっと見てこい。』（？？？）
『わぁーてるよ。』（3）
…まずいっ。光治はドアに背をあわせた。
ガチャリ（鍵を開ける音）
『ん？誰もいねーぜ。』（3）
『きっとガキのいたずらでしょう。』（？）
『迷惑な事でやんす。』（？）
光治は3がドアを開けた時、すき間から部屋をのぞいていた。
…特徴はと、一人はラモスのような髪で、一人は丁寧な言葉づかい、もう一人はやんすのチビか…。

こいつらはまさかカルクの時にきいた連続殺人犯！！…しかし3とは…？
あれは！！広梳！ま…さ……か……広梳が。
光治はその場を離れた。

…次の日放課後、
『お前等にたのみがある。』（光治）
『どうしたのあらたまって。』（舞）
『力をかしてほしい！』（光治）
話しの内容はこういうことだった。
広梳がデブ友好会の人達と戦った連続殺人犯と一緒にいた。広梳が奴らの仲間のはずがない、それを証明するため力をかしてくれ、との事だった。

『僕ならいつでも力になるよ。』（明）
『わかったわ。光治がそこまで言うなら私も手伝うわ。』（舞）

『それで僕らは何をすればいいんだい？』（明）
『明は盗聴できる装置のようなものを作ってくれ。』（光治）
『わかった。任せてくれ。』（明）
『舞は…と。』（光治）
『何よ、私はすることないの？』（舞）
『いや、舞には重要なことをやってもらう。まあ、まだ待っててくれ。』（光治）

…そして数日後、
『光治くーん、できたよー。』（明）
『どれどれ…おっ！！本物っぽいじゃん。』（光治）
『こっち（受信機）を持ってて。　僕はこっち（盗聴器）を持って

…と。』（明）
『？？？』（光治）

広梳編その3

『わっ！！』（明）
光治の耳を特大の音が貫く。
『…こ、鼓膜が破れる。』（光治）
『どんな細かな音も半径三メートル以内なら拾えるすぐれものさ。』（明）
『やるならやると言え。死ぬわっ！！』（光治）
『盗聴機はシール式にしておいたよ。』（明）
『ああ、わかった。』（光治）
…そして、舞が学校に来た。
『おう、舞、広梳がきたらこれを広梳のカバンにセットしてくれ。』（光治）
光治は舞に盗聴器を手渡した。
『何これ？』（舞）
『盗聴器だ。』（光治）
『すごーい！本当にできたんだ。明君って天才？』（舞）
『いやぁ、それほどでも……あるかな。ははっ。（照れてる）』（明）
『そこらへんでやめとけよ、こいつを増長させるだけだぜ。』（光治）
『あらっ、光治にこんなことできる？』（舞）
『うっ…それは……。』（光治）

…そして
『ところでどうやってセットするの？』（舞）
『俺が広梳と話しているうちに。』（光治）
『ＯＫ！』（舞）
『盗聴機貼るのはどこがいいと思う？』（舞）

『バックの内側に貼ったらいいんじゃないかな。』（明）
『わかった。』（舞）

…そして広梳が来た。
『おう、広梳！』（光治）
『おはよう、光治。』（広梳）
『話があるんだけどさあ、』（光治）
『何だ？』（広梳）
二人が話しているうちに舞は広梳のバックの内側にシール式の盗聴器を貼った。

…そしてその日の夜、光治ん家で。
『よし、みんな集まったな、早速聞くか。』（光治）
『ワクワクするね。』（舞）
『…ははっ、そうだね。』（明）
（←盗聴機からの音）

『フフフ、ハハハ、アーハッハッハッハ。シュミレーションは完璧だ。』（ボス）
『あとは計画を行動にうつすだけですね。』（1）
『ラクショーでやんす。』（2）
『これも3のおかげだ。これからもよろしく頼むぜ。』（ボス）
『フッ、まかせろ。』（3）
『これはいつ実行するのですか？』（1）
『そうだな、一週間後の土曜日がよかろう。』（ボス）

『いったい何をするんだろ？』（舞）
『シッ。』（光治）

『で、何をするんでやんしたっけ？』（2）

広梳編その４

『ブハハハハ、バカだぜ２の奴。（爆笑）』（光治）
『光治君も静かにしててよ。今からが大事なとこなんだから。』（明）

『朝、丸日銀行の金を盗む。１０時決行だ。』（ボス）
『わかりやんした。』（２）

…そして当日。
『くっそー、っんで、ケーサツの奴らは連続殺人犯が銀行から金を盗むっつっても信じてくれねーんだよ。』（光治）
光治は丸日銀行が見えるビルＡの屋上でトランシーバーを使って明と話している。
『まあ、それは仕方ないよ。警察ってのは証拠がないと動かないからね。』（明）
明も銀行の裏でトランシーバーを使って光治と話をする。
『チッ、だから対応が遅れんだよ。』（光治）
『ははっ、そうだね。それとも以前に光治君が警察のブラックリストに載るようなことをしたんでないかい？』（明）
光治は何か思い当たる節があるかのように間をおくと、
『ありえねーな。』
とだけ言った。

…そして、
『あっ、奴らが来たっ。武器は持ってないようだが？隠してるのか？まあいいか。で、どーやってやつらを止めるんだ？』（光治）
『銀行の職員には悪いけど、投げると、吸うと眠ってしまう煙がでてくる爆弾を使う。これを使えば銀行中の人間が眠ってしまうはず

だ。その間に3人を捕まえる。』（明）
『ああ、ゲームでよくある眠り爆弾っつーやつだな。どうやってそんなもん手にいれたんだよ。』（光治）
『知人に警察がいるんだ♪そんな事より、ゲームと一緒にしないで欲しいな。これはとても危険なものなんだから。で、奴らは？』（明）
『今、銀行に入った。』（光治）
『じゃあ、行くよ。』（明）
『おう、気をつけて行ってこい。』（光治）

…そして、少しして、明が入口から出てきた。
『どうだった？』（光治）（トランシーバーで）
『完ペキ。』（明）（トランシーバーで）
『あっ、』（光治）
『ん！？』（明）
『奴らが銀行の裏から出て行く。』（光治）
『なんだって？』（明）
明は銀行の裏に行った。
『いないよ、奴らはどこに行った。』（明）
光治からの応答がない。
明は嫌な予感がしてトランシーバーに向かって叫んだ。
不安から声もだんだん大きくなる。
『光治君！、光治君！！！、…光治君！！！』（明）

…そして
『んっ、ここはどこだ？』（光治）
『目が覚めたかい？ここは僕ん家。もう少し寝ているといいよ。』（明）
『奴らはどうなった？』（光治）
『逃げられちゃったよ。』（明）

『ごめん、……俺のせいたな。』（光治）
『いや、光治君のせいじゃあない。きみはなんで気絶したか覚えているかい？』（明）
『いや、全く。』（光治）
『これのせいなんだ。』（明）
『うっ、臭っ！！ってこれ、何も入っていないただの缶づめじゃねーか。』（光治）
『この中に何かかなり凄い刺激物があったと考えられる。何も入ってないことから空気中で気化する液体か気体だろうね。この缶づめが時間になると開くようになってたんだ。』（明）

広梳編その5

『…何故そんなものが？』（光治）
『この缶づめ、あの銀行の半径1キロ以内のとこに至る所に仕掛けられてたんだ。たぶんこれが連続殺人犯達の作戦だよ。身近な所で事件があれば、他の事なんてかまってられないからね。君は運が悪い事に君のいた所にその缶づめが仕掛けられていたってことだね。』（明）
『そーゆうことか。でも俺は気絶する前に見たんだが、奴ら（殺人犯）は途中で消えたぞ。』（光治）
『本当かい？現場に行ってみようか。』（明）

…そして、
『…町中まだ臭うな。』（光治）
『臭いね。まだ臭うのだから、当時、どれだけのものだったか容易に想像できるだろ？』（明）
『ああ、俺が倒れたのも当然ってことか。』（光治）

…そして
『着いた。ここら辺で消えたんだ。』（光治）
『…マンホールがあるね。たぶんここから…、…誰がフタを閉めたんだろ？』（明）
『犯人は三人しかいなかった。たぶんあとから広梳が…。舞の方はどうなったろ？』（光治）
『合流してみようか。』（明）

…そして、明ん家にて。
『奴らのアジトに行って武器を使えなくしておいたわよ。』（舞）
『よしっ、よくやった』（光治）

『盗聴器からは？』（明）
『要約すると、あの缶づめ、ライトクリッシュと言って広梳が作ったんだって。凄いわよねー。あのイギリスの臭い缶づめよりも数十倍臭いとか。』（舞）
『そんなことはどーでもいいんだよ。』（光治）
『こっからが本題よ。金は手に入れた。あとは十何年か前、俺達の邪魔をしたやつらに復讐してやるって言ってたわ。』（舞）
『復讐か…。何をする気なんだ。』（光治）
『何をするにしても、止めないと。』（明）
『それで日時は、……明日よ。』（舞）
『明日！？』（明）
『明日かよ、それをはやく言えよ。』（光治）
『それがわかったって今は何も出来ないでしょ。』（舞）
『ム…。』（光治）
『確かに。』（明）
『今は待つしかないのよ。』（舞）

←（舞が盗聴機から実際聞いた話）
『やったでやんす～。これでおいら達、大金持ちでやんす。』（2）
『確かに、うまくいきましたね。これも3の作ったライトクリッシュのおかげです。』（1）
『あの世界一臭いイギリスの缶づめの数十倍臭いらしいからな。全くたいした奴だぜ、お前は。』（ボス）
『フッ、まあな。あんたに昔受けた恩は返すさ。…ところでこれからどうするんだ？』（3）

広梳編その6

『フフフ、金は手入れた。あとは十何年か前俺達の邪魔をしてくれた奴らへの復讐だ。』（ボス）
『いつやるんでやんす？』（2）
『明日だ。』（ボス）

…そして明日、（休日の昼）
光治は家で寝ていた。
と、そこにマシンガンでも撃ってるかのようなおとが近づいて来る。
光治は
―うっせーな―
と思いながら窓を見る。
『ん！？』（光治）
光治は窓から空を見た。ヘリコプターが色つきの粉をまいていた。
やがてそれは空中で文字となった。
〈今すぐ井の頭公園に来い。たぷ友好会！〉

…そして井の頭公園へ行く途中で、舞と明に会った。
『見たか、あれ。』（光治）
『見た見た。何をする気何だろう。』（舞）
『とにかく行くしかないよ。』（明）
『でも何の準備も無しに行ったらどうなるかわかんねぇぜ。』（光治）
『でも来ないと周りの奴らに被害を及ぼすともあったわよ。』（舞）
『うそとも思えないよ。相手が相手だからね。』（明）
『…そんなのあったっけ？まあ、行くしかないか。』（光治）

…そして

『ここだな。』（光治）
茂みの中から誰かがでてくる。
『よく来たな。』（広梳）
『広梳（君）！！』（たぷ友好会のみんな）
広梳の後ろからぬっ、とボスと1と2がでてきた。
『俺達もいるぜ。お前達が俺達の事をさぐっていたのは知っていた。』（ボス）
『用件はなんだ。』（光治）
『なぁに、簡単なことです。ただ、元デブ友好会の方々をここに呼んでくれればいいだけですよ。』（1）
『嫌だと言ったら…。』（舞）
『んー、そうだな。』（ボス）
ちょうどよく猫が通っていた。ボスはその猫に手榴弾を投げつけた。
ボムッ。
『こうなる。』（ボス）
『…ひどい。』（舞）
『もうお前らの家族に的をつけているのでやんすが…、念のため人質をもう一人、そこの女がいいでやんすかね。』（2）
舞は人差し指で来いという合図をした。
『何？』（光治）
『幸運を祈ってるわ。』（舞）
そう言って舞は光治に握手をした。

…そして光治達は公園を後にした。

『舞の奴、なんで握手なんてしたのかと思ったら、』（光治）
『何か手渡されたのかい？』（明）
『盗聴器からの音を聞く機械だよ。…広梳のバックに貼ってあるから意味ないと思うんだが…。』（光治）
『いや、前に彼らの武器を使えなくしてもらう前に僕が舞さんに盗

聴器を渡してたんだ。もしかしたら、舞さん、自分の服に貼っているのかもしれない。』（明）

『なるほどな。スイッチをいれて見よう。』（光治）

『そうだな―

『おっ、聞こえる、聞こえる。』（光治）

―3、やはりお前も奴らについて行け。』（ボス）

広梳編その7

『わかったよ。』（広梳）
『おっと、これをもってけ。』（ボス）
ボスは3に小型爆弾を手渡した。
『ん！？、なんだこれは？』（広梳）
『念の為だ。』（ボス）
『フ……ン。』（広梳）
そして広梳はチャリで光治たちのあとをつけていった。
『クックックック。』（2）
『フフフフ。』（1）
『ハッハッハッハ。』（ボス）
『何がおかしいの？』（舞）
『ハハハ、それは教えらんねぇな。』（ボス）
『？？？』（舞）

…そして広梳は光治達に追い付いた。
『広梳！？、何しに来たんだ？』（光治）
『おまえ達の監視だ。』（広梳）
『そうかよ。』（光治）

…そして井の頭公園にケント以外は集まった。
…ケントはと言うと
ここは警察署。
『ケントさ～ん。』（明）
『なんだ！？今勤務中だと言うのに。』（ケント）
『実はかくかくしかじかで。』（光治）
『何ィ、それは早急に向かわなくては。』（ケント）
そしてケントは光治達と同行した。

…２０分後、
２は時計を見ている。
『ボーン。』（２）
『ハッハッハッ、これで、奴らは消えた。』（ボス）
『ハッ。まさか。』（由香）
『そのまさかだ。』（１）
『光治達を殺ったというのか。』（クリフ）
『仲間まで殺すなんて…』（あしべ）
『ああ？天才なんぞ所詮使い捨てだろうが。何を考えているかわからない連中だからな。』（ボス）
『ひど過ぎる。』（大智）
『クッ、ケント。』（僕）
『光治、明君。』（舞）
（広梳のもってった爆弾は時限爆弾で、広梳をだましてあらかじめ計算させておいた為。（殺す時期がわかった））

…ケントが光治と同行して１９分後、
『爆発、爆発まだでやんすかねぇ。』（２）（受信機から）
『何ィ、爆発ー？まさか。おい広梳、その爆弾、よこせ。』（光治）
『違う、これはそんなもんじゃない。』（広梳）
そうして爆弾の取り合いになり、とうとう、光治がそれを投げた。
とたんに
バァーーーーーーーン。爆弾は爆発した。
衝撃で光治含む全員（明、広梳、ケント）が倒れた。
『チッ、この俺をハメやがったな。奴らにこの俺の恐ろしさを思い知らせてやる。』（広梳）
『待て、俺も行く。』（光治）
『ありがとう。でもお前には迷惑をかけられない。（時計を見て）もう行かないと』（広梳）

ドスッ、広梳は光治を殴った。
『まて、行くな…。…おい。…俺も……一緒に…。』（光治）
『こいつは無茶をするからな。…コイツ、頼んだぜ。』（広梳）

広梳編その8

『え！？、ああ、うん。』（明）
そうして広梳は去って行った。
『俺は別行動をとる、そいつは頼んだ。』（ケント）
『ああ、はい。』（明）
そうしてケントも去って行った。

…そして、広梳は公園に着いた。
『ボス以下二人、覚悟しろ！』（広梳）
『ゲッ。』（2）
『何故お前がここに。』（ボス）
広梳はライトクリッシュを使った。（自身はマスクして。）
バタッ、バタッ。
そこにいる全員が倒れた。
『？？？、ボスがいない？』（広梳）
そしてボスはというと、公園からいくらか移動していた。
『ハァハァ。うっ、ゲホッ、ゲホッ。危ねぇとこだった。（服を鼻にあてている）』（ボス）
ザッ。（誰かがボスの前に現れた）
『俺はお前を捕まえるために警察になったんだ。ここで逃がすわけにはいかない。』（ケント）
『甘いな、くらえ！』（ボス）
ボスは銃を撃ったしかし、カチッ、カチッ。
『無駄だ、舞と言う女の子が武器は使えなくしておいたそうだ。』
『チッ、チクショウ。』（ボス）

…そしてこのあとボス、以下二人はつかまった。
明が公園に着いたときの事を再現すると（全員倒れていた）『先輩

ーーー。』と凄いリアクションをしていたが、まあ、それはいいとしよう。
広梳はというと、
『こんな危険な奴は署には置いていけないな。お前らが世話をしな。そうだ、コイツはたぷ友好会にいれてやれ。
ボソッ（天才は何かと使えるだろ）（光治に向かって）』（ケント）
ケントさんが言っていたその一言が嬉しかった。
『それでいいんですか？』（光治）
『それで悪いのか？』（ケント）
『いや、いいです。』（光治）

…そして次の日
『…というわけで広梳がたぷ友好会に入る事になった。』（光治）
『先輩の言う事じゃあ仕方ないわねぇ。』（舞）
『うん』（明）
『改めて、城戸広梳です。よろしく。』（広梳）
『よろしく！！』（みんな）

芦来河編その1

とある日の学校、
『キャー、キャー、キャー。』（女子達）
『なんだあの女子の集まりは？』（光治）
『あら、知らないの？中心に誰かいるでしょ。』（舞）
『誰だあれは。』（光治）
『あの人はこの学校のアイドルである芦来河（あしらかわ）　優君（すぐる）よ。ジャニーズ系だし、スポーツやらせても勉強やらせても優秀で、もてるのよねぇ。』（舞）
『そんな人いたっけか？』（明）
『…明君まで。（笑）』（舞）
『気にくわねぇな。』（光治）
『彼がモテるからでしょ。』（舞）
『断じて違う。』（光治）

…そして部会。
『…っつー奴がいてさぁ。』（光治）
『それはただの嫉妬だろ。』（広梳）
『違うって。』（光治）
『何が違うんだい？』（明）
『うっ、……、何かが違う。何か嫌な波動を感じるんだよ。』（光治）
『何それ。』（舞）

…帰りの電車にいる時の事、
『どけっ、女。そこは俺の特等席だ。』（芦来河）
芦来河は席に座っている女の子をむりやりどかした。
『痛っ。』（女の子）

『おい、てめぇ、先に座ってたのはその女の子じゃねぇか。てめぇがどけよ！そして女の子に謝れ。』（光治）
『誰だい、君は？』（芦来河）
『俺は和田光治。そんな事よりその女の子に謝罪しろ。』（光治）
『嫌だね。どうしてもと言うなら、僕と勝負して勝てたらこの女の子に謝ってあげるよ。その代わり、』（芦来河）
『なんだ！？』（光治）
『君が負けたら、んー、そうだね、ぼうずになって芦来河様に逆らってすみませんでした、と言いに僕のクラスまで来てもらおうか。』（芦来河）
『上等だぜ！！』（光治）
『あともう一つ。』（芦来河）
『なんだよ。』（光治）
『たぶ友好会を解散してもらおうか。』（芦来河）
『何故それを。』（光治）
『君は乱暴者で有名なんだよ。』（芦来河）
『ま、以上の条件なら勝負してあげるけど？』（芦来河）
『ケッ、首あらってまってろ。』（光治）
『おっと、日時は来週の日曜日８時、場所は井の頭公園で。それと君の方こそ、ぼうずになって謝りにくる覚悟をしておいてくれよ。』（芦来河）

…そして次の日の部会、
『…っつー事になってよ。』（光治）
『バッカじゃないの！？芦来河君と勝負するなんて。』（舞）
『勝算はあるのかい？』（明）
『……（首を振る）。』（光治）
『じゃあ、何か仕掛けるしかないが…。』（広梳）

芦来河編その２

『俺は真っ向勝負で奴を倒したいんだ。』（光治）
『…やっぱりな。』（広梳）

…そして約束の日、
『どうやら、逃げずに来てくれたみたいだね。』（芦来河）
『ったりめーだ。…で、勝負というのは？』（光治）
『ひとつ目と二つ目は君が決めていいよ。しかしみっつ目は僕が決める。』（芦来河）
『じゃあ、ひとつ目はパンチの攻撃力勝負だ。』（光治）
『いいだろう。』（芦来河）
…そして街のゲームショップで。
バーン、１８２（パンチングマシーンで）
『へヘン、次は俺だぜ。』（光治）
バーン、１８９
『よっしゃあ、俺の勝ち。』（光治）
『じゃあ、次だ。』（芦来河）
『次はサッカーで勝負だ。』（光治）

…そして、結果、
２―１で芦来河の勝ち。
『どうしたんだい、光治君。』（芦来河）
『ヘッ、最後で決めるぜ。』（光治）
『最後はテーマはなし。ボクシング、合気道、剣道、どんな種類の戦い方でもいい。つまり、ただのケンカさ。倒れるか、降参した方の負け。単純だろ？』（芦来河）
『武器もありかよ。』（光治）
『もちろん。殺傷力の高い刃物や銃器はダメだが、持ってくるなら

３０分くらい待ってあげてもいいけど。』（芦来河）
『いや、いい。』（光治）
―つーか、喧嘩にそんなもん持ってくる奴いねーよ。―（光治）
…そして芦来河があの時の女の子をつれて来た。
『なんでおまえがその子の住所知ってんだよ。』（光治）
『どうだっていいだろ。』（芦来河）

…そして
『よし、やろうぜ。』（光治）
ジャリ（ジャリを踏む音）
ヒューーーー、風の音が鋭く鳴る。
光治の先制、
『おりゃあ。』（光治）
スカッ、スカッ。ミス。
芦来河は全てよけた。
芦来河のターン、
『君の振りはでかすぎるんだよ。』（芦来河）
芦来河は余裕でいる。
光治のターン、
『くらえぃ。』（光治）
ドカッ、会心の一撃、
芦来河５８０のダメージ。
『グッ、さすが。パンチングマシーンの数字は伊達じゃないね。』
（芦来河）
『僕もそろそろ本気を出すか。』（芦来河）
芦来河は棒を見つけ、手に取った。
『これでいいか。』（芦来河）
芦来河のターン、
『今度は僕の番だ。連の巻、無限（むげん）の創美苑（そうびえん）。』（芦来河）

ダダダダダ。（突きの連打）
『うわぁ。』（光治）
光治は１５００のダメージ。光治は倒れた。
『僕の無限の創美苑は僕の家で習っている技をさらに昇華させた、
僕が考えたもの、君ごときに破れる技じゃあない。』（芦来河）
『チッキショウ。』（光治）

芦来河編その２（後書き）

ここら辺からかなり適当入ってます。
実際にはないことや実際と異なることも入るので
そこはご了承ください。

芦来河編その3

『さてと、君の負けだね。でもこの僕にひとつでも勝てたっていうのはすごいことなんだ。引き分けにしてあげるよ。』（芦来河）
そうして、芦来河は去って行った。
『クッ、もう一度勝負しろ。』（光治）
『いつでもどうぞ。』（芦来河）

…そして女の子が来た。
『彼はフェンシングの達人なんです。勝てるわけがありません。私のために無理しないでください。ありがとうございました』（女の子）
そう言って去った女の子はどこかさびしそうな顔をしていた。
『クッ、次こそ必ず勝ってやる。』（光治）

…そして部会、
『…っつーわけで負けちまった。』（光治）
『負けたの？』（舞）
『つーことは解……散？』（明）
『いや、奴はひとつでも勝てたから引き分けにすると言っていた。』（光治）
『やっとこさっとこだな。…で、お前はこのままでいるのか？』（広梳）
『まさか。再戦の約束をしたさ。』（光治）
『もう一度戦うなら、ケントさんに鍛えてもらったらどうかな？』（明）
『強いのか？』（光治）
『うん、かなり。』（明）

…ということでケントさんと話をつけて日曜日にけいこをつけてもらうことになった。

…そして当日、

『じゃあ、行くぞ！』（ケント）

『はい。』（光治）

…そして猛特訓が始まった。

…『初撃が遅い。』

…『攻撃のあと相手の攻撃をよけられる余力を残しておけ。』

…『足！』

…そして特訓が終わった。

『いいか、今日の特訓はその芦来河という奴に対してはほとんど意味ない。』（ケント）

『えっ！そうなんすか』（光治）

光治はこれまでないというほど落胆の顔を見せた。

『まともに勝負すればな。何年もやって来たやつに今日一日やっただけの奴が勝てるわけがない。大切なのは工夫だ。その芦来河って奴に勝てる工夫をしろ。それにお前自身も少しはマシになっているはず、勝率は前よりは確実に上がっている。』（ケント）

『はい。』（光治）

『あとはお前しだいだ。』（ケント）

…そして、学校（芦来河のクラス）にて

ガラッ。（教室のとを開ける音）

『芦来河ぁ～～～、今週の日曜、同じ時間、場所で勝負しろ！』（光治）

芦来河編その４

『君も騒がしいね。そんな大声ださなくても聞こえるよ。もちろん返事はＯＫだ。後悔するなよ。』（芦来河）

…そして約束の日、

『勝負は？』（芦来河）

『もちろんケンカ一本勝負。この前の続きだぜ。』（光治）

『頑張ってください。』（女の子）

『何故君が？』（光治）

『僕が君に負けたら、謝らなければならないだろ？』（芦来河）

『あ、なるほど。』（光治）

…そして、

『じゃあ、この前のおさらいからだ。連の巻、無限の創美苑。』（芦来河）

ダダダダダ。突きの連打がくる。おそらく芦来河にとっては基礎の技だろう。

光治は一撃をくらったあと、芦来河に密着した。

『これでどうだ。』（光治）

『ハハッ、君はバカかい？これじゃあ、君も攻撃できないだ…ハッ（気ずいた）。』（芦来河）

『ところがどっこい、こちらも無駄に特訓してねぇんだよ。』（光治）

光治は密着した状態から芦来河を投げ飛ばした。

芦来河は投げ飛ばされながら、空中で体勢をたてなおした。ザザザザー、（土と靴がすれあう音）

『クッ、なるほどね。まさか密着した状態で…。…やるね、じゃあこれは？集の巻、夢幻（むげん）の風遊乱（ふゆうらん）』（芦来河）

―頭を狙ってるな―

光治は芦来河の技をよけた。
ダダダダダ。
―これは一箇所に何度も突くような技か。―
『なるほど、これはよけるか。じゃあ、僕の得意技…』（芦来河）
『そう何度も攻撃されてたまるか、くらえ。』（光治）
会心の一撃、しかし芦来河はよけた。
『速の巻、万杖の夢幻昇（ばんじょうむげんじょう）』（芦来河）
ダダダダダ。光治の目では捕らえられない連打が来る。
…速い、全く見えねぇ。だが、
全てヒット。
しかし光治は後ずさりしつつも持ちこたえた。苦しそうな顔をしつつも余裕ぶってこう言う。
『フフーン、身構えれば耐久力には自身あるんだよね、俺は。』（光治）
『…まさか。これまでも。』（芦来河）
芦来河は驚きのあまり呆気にとられている。
『これで最後だ～～～。』（光治）
ドカッ。
渾身の一撃。
芦来河、１８００のダメージ。芦来河はふきとんだ。
『クッ、僕の負けだ。』（芦来河）
芦来河は女の子のところに向かい、ぶっきらぼうにこう言う。
『悪かったな。』（芦来河）
『あ…いえ。』（女の子）
そう言って、芦来河は去って行った。
『チッ、なんでぇ、あのヤロウ。』（光治）
『あの、ありがとうございました。』（女の子）
『あ…いや。（照れてる）』（光治）
『じゃ、また。』（女の子）
女の子もそう言って去って行った。

『また？』（光治）

…そして部会、

『…そこで俺がパンチを決めて勝ったってわけ。』（光治）

『へ～、すごいじゃないか。』（明）

『どーせ、ずるしたんでしょ。』（舞）

『いや、でもよくやったよ。』（広梳）

『ずるなんかしてねぇ～。』（光治）

芦来河編完結

芦来河編その４（後書き）

ここいらで各キャラクターの人物設定を。

光治…ケンカ番長？

舞…性悪女。うわさ好き。情報通。

明…オタクっぽいがオタクじゃない…かも。パソコンに優れている。いい奴。

広梳…バカな天才（利用されるし、キレるともの事を考えずに先に行動するタイプだから）、忠義な奴。いたずらの神。

芦来河…なんでもナンバーワン？（光治に負けたからそうではないかも。）

かっこつけ。

墨…活発な少女

ラブレター編その1

とある日、学校裏にて。
『付き合ってください。』
『えっ！（ドキッ）』（光治）
『じゃあ、詳細は手紙に書いたんで。』
そう言って女の子は走り去ろうとする。
『待ってくれ！君の名前は？』（光治）
『あたし墨、竹林墨（たけばやしすみ）です。（走ってふり向きながら）』（墨）
『あ、ちょっと、君は…あの時の…。』（光治）
墨は去って行った。

それはちょうど舞が植物に水をかけようと学校裏に来たところだった。↑（光治と墨がいたのと反対の所）
『見たわ、見てしまったわ、光治が告白される？うーん、これは……おもしろくなりそうね。』（舞）

そして部会の後、
『じゃーな。』（光治）
『またねっ。』（舞）
『じゃーね。』（明）
『じゃっ。』（広梳）
光治が帰った後、舞は明と広梳を呼び止めた。
『ちょっとちょっと、』（舞）
『何だよ、俺達の襟（えり）引っ張んなって。』（広梳）
広梳はタバコを吸いながら話す。部屋が臭くなると悪いので窓は開けてある。
『舞…さん？く、首絞まるっ。』（明）
『あ、ごめん。それより大ニュースよ、光治が告白されたのよ。』

（舞）
『マジ？』（広梳）
『ホントに？そうかぁ～、光治君にも春が来たかぁ～。』（明）
『光治がなぁ。あの女ベタの光治が…。どこまでもつかな。…で何をたくらんでいるんだ、お前は？』（広梳）
とたんに舞の顔がにやける。邪悪に微笑んだ、ともいいかえられるかもしれない。
『あ、バレた？もちろん邪魔をするのよ。この三人で。』（舞）
『…悪魔だ。』（明）
『何か言った？』（舞）
『…いや……何も。』（明）
『俺はパス。そんな事してるほど暇じゃねーんでな。』（広梳）
『僕も。やる気になれないよ。』（明）
『あらっ、あんた達に拒否権はないのよ。』（舞）
『どーゆう事だ？』（広梳）
『タバコの事、バラしてもいいの？停学どころか退学なるかもよ。』（舞）
『うぐっ、汚いぞ。』（広梳）
『明君はこのことにのってくれないと学校のメインコンピューターに不法アクセスしたこと、バラしちゃうかな。』（舞）
『なっ、何故それを！？記録は完全に消去したはず。』（明）
『あたしの情報網つかえば簡単よ。それより、このことにのってくれるの？くれないの？』（舞）
『のります。』（明）
『チッ、しかたない。』（広梳）
『やった。じゃあ決まりね。』（舞）
そこに部室の戸をガラッと開けて誰かが入ってきた。
『待った。』（？？？）
『あずさ！？まだ残ってたの？』（舞）

ラブレター編その2

『話は聞いていたわ。その作戦、わたしもまぜて。』（あずさ）
『わかったわ。じゃあ、この四人で頑張りましょう。エイ、エイ、オー！』（舞）
『お～』（明）（やる気ない）
『お、…おう』（広梳）（やる気ない）
『オー！』（あずさ）（やる気ある）

…そして、日曜日、ここはパラダイスキングダム（遊園地）。
四人とも変装している。
『本当にパラキンに来んのかぁ？』（広梳）
『あたしの情報網よ。まず、間違いないわ。』（舞）
『あっ、来たっ。あの二人じゃない？』（あずさ）
『舞さんの情報網って……一体？』（明）
『しっ、何か言うわよ。』（舞）

…光治の視点から
墨がやって来た。
『おーい。』（光治）
光治は手を振っている。
『はぁ、はぁ、はぁ、待ちました？』（墨）
墨が小走りによって来る。
『いや、それほどでも…。』（光治）
『よかった。それと来てくれてありがとうございます。』（墨）
『どういう事？』（光治）
『来ないんじゃないかってずっと心配してたんです。』（墨）
『はは、無用の心配だよ。君みたいな可愛い娘の頼みはことわれないさ。』（光治）

観察していた四人組は同時期に同じショックを受けた。
―キャラ変わっとるー。―

『光治君ってお世辞がうまいんですね。』（墨）
―…本当なんだけどなぁ。―（光治）

『で、どこに行こうか？』（光治）
『え…とー、私はぁー、やっぱあれかな。』（墨）
『ジェットコースター？……マジで？』（光治）
みるみるうちに光治の顔が青ざめる。
『乗れないんですか？』（墨）
『いや、乗れないこともないけど。』（光治）
『じゃあ行きましょう。』（墨）

…そして
カタカタカタカタ、（ジェットコースターが坂を上る音）
ゴーーーーー、（下る音）
『ぎゃあああああ。』
『キャアーーーーーーー。』
（上は光治、下は墨）
（墨は楽しんで悲鳴をあげているが光治は本当にこわがって悲鳴をあげている図）
そして終わった。
『もう一回乗りましょ。』（墨）
『…マジで！！』（光治）
『やっぱり…無理してません？』（墨）
『え・う、う、ううん、無理なんかじゃ、全然無理なんかじゃないよ。』（光治）
光治の顔は真っ青だ。

…そしてもう一度、
『ぎゃあああああああ。』（光治）
そして終わり、
『じゃあ、もう一度。』（墨）
―ああ～、一体何回乗る気なんだこの娘はぁ～。―（光治）
…そして
『ぎゃあああああああああ』（光治）

舞達の視点、（ジェットコースターの下にいる）
『あはははははは。楽しくやってるみたいだね。』（明）

ラブレター編その3

明は望遠鏡で覗いている。
『笑っている場合じゃないわよ。なんとか邪魔しないと。』（舞）
『しっかし、ジェットコースターは邪魔のしようがないんじゃないか？（タバコ吸いながら）』（広梳）
『いーえ、なんとしてでも邪魔させてもらうわ。』（あずさ）
『どうするんだ？』（広梳）
舞は広梳と明の肩をしっかとつかんでこう言う。
『そ・こ・は、あんた達の出番よ。』（舞）
『え？』（広梳と明）
『でもジェットコースターでどうやって…』（明）
『あれ？あの人は？』（あずさ）
あずさは見たことのあるような人影を見つけた。
『どうしたの？あっっ！』（舞）
『あれは…芦来河！！（広梳）
芦来河君！！』（明）

…そして、（４人は芦来河のところに行った）
『ん！？誰だい君達は？』（芦来河）
『どうしてあんたがここにいるのよ。』（舞）
『…質問しているのは僕なのだが―妹がここに遊びに来てるって聞いてね。連れ戻しに来たんだ。』（芦来河）
『うそつけ、妹を心配して来たくせに。』（舞）
『なっ、うそじゃない。芦来河家はだいだいエリートだ。本来こんなとこで遊んでる余裕なんてないのさ。…で、君達は誰だい？』（芦来河）
『たぷ友好会の…』（舞）

『ああ、光治君が入っているあのダメダメクラブのメンバーかい？』
（芦来河）
『ちょっ、ダメダメクラブって』（舞）
舞が芦来河にいきなりかかるところを広梳が制した。
『力を貸してほしい。』（広梳）
『…という事なんだ。』（明）
『光治君のデートを邪魔する為に手伝って欲しいって―。嫌だね。こちらにはこちらの事情が……』（芦来河）
『いいから来なさいよ、あんた。』（舞）
『クッ、やめろっ。襟を引っ張るなぁ～～。』（芦来河）

…そして
『じゃあ、いいか、俺が計算して明がパソコンで確かめたこの紙にある通りに物投げてくれ。』（広梳）
『何故僕がこんなことを…ブツブツ。』（芦来河）
『このタイミングと角度で正確に投げられるのはおまえしかいないんだ。』（広梳）
ビュッ、
芦来河は石を投げた。
『よし！角度は完璧だ。…あとはタイミングだが、本番でやってもらうか。』（広梳）

…そして、
『投げるものはこれよ。』（舞）
『これ……でいいのかい？』（芦来河）
ゴーーーーー、
『あ、ジェットコースターがきたわよ。』（あずさ）

ラブレター編その４

芦来河は手に持っている物を投げた。

光治達の視点で

『う～～、やべぇ～、死ぬ～。（ジェットコースターに乗っている最中）』（光治）

―ん？白い何かが飛んで…―（光治）

ベチャ、（白いものが顔についた。）

…そしてジェットコースターは止まった。

『あ～、楽しかったですね。』（墨）

墨は光治の方を向いた。

『キャーー。どうしたんですか？いつの間にかソフトクリームを顔につけて。』（墨）

『ソ、ソフトクリームが降ってきた。』（光治）

光治の顔はソフトクリームまみれだった。

バタッ。ショックで光治は倒れた。

…そして舞達の視点、

広梳、舞、明、あずさの四人は望遠鏡でその一部始終を見ていた。

『あっはっはっはっは。』（四人）

『芦来河、やっぱおまえ天才だよ。ハハ、ビデオにとっときゃあ、良かった。』（広梳）

『でしょ、だから誘ったのよ、あはははは。』（舞）

『かわいそうだよ～、ククククク。』（明）

『…光治君。…こんなはずじゃあ……。ププ、でもおかしーーーー。』（あずさ）

『何をバカ笑いしているんだい？まあ、いい。これで僕は失礼するよ。』（芦来河）
そうして芦来河は去って行った。

そして、光治の目が覚めた。
『ん！？ここは？』（光治）
『休憩所のベンチです。大丈夫ですか？』（墨）
『ああ。しかしひどい目にあったな。』（光治）
『全くです。こんなひどい事する人がいるのならこらしめてやりたいです。』（墨）
『ふあ〜あ。（あくび）じゃあ、次はコーヒーカップにでも行くか。』（光治）
『はい。』（墨）

舞達の視点、
『次はコーヒーカップに行くようだよ。（望遠鏡を使っている）』（明）
『そう。何か作戦は？』（舞）
『ないな。大体、コーヒーカップじゃやってもばれるんじゃないか？』（広梳）
『う〜ん。』（あずさ）
『とりあえず様子を見てみようよ。』（明）

…光治達はというと、コーヒーカップに乗っていた。
『ところで君、あの電車の時の、芦来河との戦いの時に来た女の子だよね。』（光治）
『あ、はい。実はあの人は私の兄なんです。』（墨）
『何〜〜〜〜〜〜〜〜〜、ど、ど、ど、どびっくりだよ。だって名字違うじゃん。』（光治）
『腹違いの兄妹なんです。兄は父上とおんなじ血をひきながらでき

ない（ナンバーワンになれない）私が疎ましいらしくて……。』（墨）

『なるほど、それで芦来河は君に辛く当たってたのか。』（光治）

ラブレター編その5

『はい。…あれでも昔はいい兄だったんです。…それと光治君にまで迷惑をかけてすみません。』（墨）
『迷惑だなんて思ってないよ。』（光治）
『ありがとうございます。』（墨）

舞達、
『次よ、次にかけるのよ。次は？』（舞）
『お化け屋敷みたいだね。』（明）
『あそこのお化け屋敷は暗くて有名だからなんでもできるな。』（広梳）
『狙い目ね。』（あずさ）

…そして光治達と舞達はお化け屋敷に入って行った。
『…暗いですね。』（墨）
『そうだね。ここは鍾乳洞をお化け屋敷にしたらしいからね。まわりも岩だし…。』（光治）

舞達の視点、
『暗くてあんまり見えないじゃないのよー、どうする？』（舞）
『……というのはどうだ？』（広梳）
『いいわね。…で、誰がやるの？』（舞）
『じゃんけんでどうかな。』（明）
『賛成ー。』（あずさ）

…そして光治達、
『キャー。』（墨）
墨がだきついてきた。

『（ドキッ）な、何？』（光治）
『あ、あれ。』（墨）
白目をむいた人の顔がライトで照らされていた。
『プッ、ハハッ。子供だましだよ。…それにひっかかるなんて…ハハッ。たぶんバイトの人だよ。』（光治）
墨は下を向いて赤面する。
…それにしてもあれ、舞に似てるなあ。
…そしてお化け屋敷を満喫し、終わりに近づいた。
『光治君、今日はありがとうございました。本当に楽しかった。お礼をしたいのですが…。目をつむってもらえますか？』（墨）
『え…うん。』（光治）
―キスか、キスだな。つーか、キスに決まりだろ。―（光治）

…その時、舞達は、
『あ～、あんなとこでキスをしようとしてるわ。邪魔しないと。』（舞）
『あんた、行きなさい。』（舞）
ドンッ。舞は広梳を押したつもりだった。…が、
ドンッ（あずさは墨にぶつかった）。実際にはあずさを押していた
『…あれ？光治君？（見失った）』（墨）
―ん？遅いな。じゃあこちらから。―（光治）
―きゃぁぁぁぁ、光治君の唇がこっちに向かってくる。…ちょっと嬉しいかも。じゃなくて、キャー。―（あずさ）

舞達、
『あれ？、あんた広梳？』（舞）
『おう。どうした？』（広梳）
『明君はここにいるし、…てことは……！？、さっきおしたのはあ

ずさ!?あずさが危ない。』（舞）
…とそこに芦来河が。

ラブレター編その6

『おかしいな、ここで妹らしき人を見つけたのだが…。』（芦来河）
『ちょうどよかった。妹のピンチなのよ（ウソ）、あんた行きなさい。』（舞）
ドンッ、舞は芦来河をおした。
ドンッ、（あずさにぶつかってはじきとばした。）
ブチュ。
『……。』（芦来河）
明はどうなったのか確かめる為にライトをつけた。
『あはははは～』（墨、明、あずさ、広梳）
芦来河はあたりをみまわした。（墨がいた）

『…なるほど、妹をたぶらかし、連れまわした犯人が君だったとは。それだけではあきたらず、僕のファーストキスまで奪うとはね。』（芦来河）
芦来河はふつふつと怒りがわいてくる。
『光治君、今度という今度は許さないよ。（全身全霊の）無限の創美苑。』（芦来河）
ダダダダダダ、
ダンッ、光治は倒れた。
『ど～して、こ～なるの～。（バタンキュ～）』（光治）
『さあ、帰るぞ。』（芦来河）
『あ、待って。光治君、これを…。このペンダントを渡そうと思ってたんです。』（墨）
―…へ？キスじゃなくて？―（光治）
ペンダントを渡して、芦来河と墨は帰ってった。

…そして後日、
『女ベタぁー。』（舞）
『るせっ、つーか、お前等が邪魔してたんじゃねーか。』（光治）
『それにしてもあれはないわよねぇー。』（舞）
『そうだな。あれは強引過ぎる。』（広梳）
『光治君も付き合うにはまだまだってことだね。』（明）
『ッキショー、グレるぞ俺。』（光治）
『まあまあ、あたしがみんなの分ラーメンおごってあげるからさ。』
（あずさ）
『チッ、それで許してやんぜ。』（光治）

ラブレター編おわり

光明編その1

二年前、
『…よんで』
―ん？何だ！？頭の中で声が。―（光明）
『よんで』
―クッ、まただ。頭痛もする。―
『わたしを　　呼んで！
　　オレを　　呼べぇ！』
うわぁぁぁぁぁ。頭が……割れ…る。
ドクン。

この夜、一夜にしてある暴力団がひとつ、消えたという。

学校に登校するときのこと、
ドンッ。舞は余所見をして誰かにぶつかった。
『あっ、すみません。』（舞）
『いえいえ、こちらこそすみません。』
『花壇に水をやってるんですか？』（舞）
『うん、これはチューリップ…』
『（…それは見てわかるんだけど。）じゃあ、こっちの花は？』（舞）
『…、実はこの花壇にある花はチューリップしかわかんないんだ。他の花は親戚に貰ったものでね。今調べてたんだけど。』
よく見ると、その青年は片手に『日本の草花』と書かれた本を持っている。
『あはははは～、何それ。キミ、面白いね。私の名前は舞。キミの名前は？』（舞）
『光明。妃（きさ）光明（みつあき）。でも名前なんて知ったって意味ないんじゃ…。』

（光明）
『同じ学校なんだから、名前さえ知ってりゃいつかまた会えるでしょ。』（舞）
『ははっ。そうだね。』（光明）

…そして舞は教室に入った。
『光明君かぁ～、私好みのかわいい子だったなあ。』（舞）
『ビジュアルは芦来河君に似てるけど、髪は真っ白だったし、いいなあ、あーゆーの。』（舞）
『何ポケーっとしてんだよ。授業始まるぜ。』（光治）
『し、失礼ね。ポケーっとなんてしてないわよ。』（舞）
『いーや、してたね。あの顔はステキな人に出会えた、ラッキー、って顔だったね。』（光治）
『光明君はそんな…。それにそんな顔してないわ。ねぇ、明君。』（舞）
『…え…と、してたかな。』（明）
『うそ。』（舞）
『誰が見てもそんな顔してたぜ。』（広梳）
『どんな顔よ。』（舞）
『こんな顔（マヌケ顔）』（光治）
『うそー。』（舞）
舞は赤面した。

下校の時のこと
『あっはっは。しかし今日は最高だったな。』（光治）
『ああ、舞さんのこと？でもあれはかわいそうだったよ～。』（明）
『しかしあそこまであの舞を追い詰められるとはな。』（広梳）（タバコ吸いながら）
『傑作だったな。（笑）もう一回してぇ。』（光治）
『無茶言わないでよ。それより、もう駅だよ。』（明）

『ああ、じゃあな。』（光治）
『じゃ。』（明）
『ああ。』（広梳）
その時、
プーーーーーー。車のクラクションの音だった。その方向をみると女の子がひかれそうになっていて、その車のスピードから光治は危険だと判断し、体を動かしていた。
『危ねぇ。』（光治）

光明編その2

光治は轢(ひ)かれそうになっていた女の子に飛びつくようなかたちになり、転がった。
『大丈夫か？』（光治）
『あ、はい。ありがとうございます。あ、ひじのあたりにすり傷が…。』（女の子）
『おーい、大丈夫だったか』（広梳）
広梳と明がやってきた。
『おう。』（光治）
女の子は光治の傷を眺めていた。
『あ、大丈夫だから。』（光治）
『こんな傷、わたしの能力でなおせます。』（女の子）
『へ？』（光治）
女の子は光治のひじに手を当てると、みるみるうちに傷が回復した。
『あ、なおった。君、すごいね。』（光治）
光治は感嘆の色を浮かべている。
『いや、わたしができるのはこんなことぐらいなもので…。』（女の子）
『超能力者？』（光治）
『ま、そのようなものです。』（女の子）
『そのカバンからみるとウチの学校の人だよね。名前は？』（光治）
『刹那(せつな)、ともうします。』（刹那）
『刹那ちゃんか。知らない子だな。／／／ちなみにメルアドと携帯番号教えてもらえない？』（光治）
スパコーン。（すかさず、広梳がハリセンでどついた）
『なんで助けた子をナンパ（のようなもの）してんだよ。墨がきいたら泣くぞー。』（広梳）
『あいつは家柄が家柄だからもう会えねぇよ。』（光治）

『それにしても恩をなすりつけるような、罪悪感はないのかい？』（明）
『まあ、いいじゃねーか。かわいいんだから。』（光治）
『…。』（明）
『はあ？まあ、わたしはかまいませんが…。』（刹那）
『今日は本当に最高の日だぜー。』（光治）
光治は上機嫌で帰っていった。
『まったく、光治君ってば。』（明）
『同感だ。』（広梳）

その日の深夜、光治は寝ぼけて外に出た。
とある公園に着いた時、そこで光治は山積みになって倒れている人達の上で座っているある人影を見た。

月が映える夜。

あれは、ヤバい。目を合わせちゃいけない。
しかし、ドンッ。（目が合った）
―しまった―
ニイ（彼の不適な笑み）

彼は

『ヒャハハハ、なんだ、テメェ。俺様は花月（かげつ）様だ。』

まるで屍の上に立つ死神のような様相で

『お、俺は』（光治）（足がガクガクふるえている）

不適な笑みを浮かべると

『ケッ、ザコか。つまんねぇ。』

漆黒の暗闇の中を通りすぎ

『―』（光治）（彼は光治の横を通りすぎていったが、光治はその光景と彼の邪悪な顔から恐怖でものも言えなかった。）

どこかへ消えていった。

光明編その3

『ハァ、ハァ。あれは確実に、俺より強い！！！。何だったんだ、あれは。』（光治）
光治は当時の自分を思い出すが、レベルが違うと実感した。

次の朝
放課後、四人で部会で楽しく談笑していた矢先、
ガラッ。（戸を開ける音）
だれかが入ってきた。
『ここは…、理科室か、間違えた。』
『光明君！！』（舞）
光明は手をふった。
『刹那さん！　（明）
刹那！！　（広梳）
刹那ちゃん！』（光治）
『いや…まさか、花月？』（光治）
（何故光明が刹那や、花月で呼ばれたかというと三人とも顔、姿、形がそっくりだからだ。）
―刹那―
―花月―
―ドクン―
光明は刹那や花月という声を聞くと頭をかかえて走って行った。
『あ、待って。』（舞）
『…行っちゃったね。』（明）
『刹那じゃないのか？』（広梳）
『花月かもしれない。』（光治）
『どういうこと？』（舞）
四人は同じ人物が三人いることを話しあった。そしてなにより不可

思議なのが刹那や花月と聞いて逃げて行った光明のことだ。接点はあるのか？
『どうやら、本人にきいてみるのが1番のようね。』（舞）
ということで四人は光明を呼びだした。
『何？』（光明）
『光明、刹那や花月についてなんだが…。』（光治）
ダッ。光明は走って逃げようとした。
『待って、逃げないで。何か関係があるのなら、教えて欲しいのよ。』（舞）
光明はおとなしく捕まった。
『奴らの名を呼ばないでくれ！！』（光明）
『どういうことなの？』（舞）
『奴らは…僕なんだ。』（光明）
『ますますわからんな。光治、おまえ、わかるか？』（広梳）
『いや、さっぱりだ。』（光治）
『もしや、二重人格なんじゃ…』（明）
『そんな生やさしいもんじゃない。』（光明）
『もったいぶらずに教えやがれ！！』（光治）
『君に教えたって、どうとなるわけでもないだろ？』（光明）
『もしその事でお前が悩んでんなら、俺らが全力でとりくんでやる。』（光治）
『っ！！！』（光明）
光明はまわりを見た。
舞は任せろのサインをとっていた。
明はうなずいていた。
広梳はフッ、といい、かすかに笑っていた。
『何故会ったばかりの僕にそこまで…。』（光明）
『それは…そう、お前が困っていたからだよ。』（光治）

光明編その４

『……。』（光明）
『そんな事、気にする必要ねーぜ。困ってたら助けるのが人間っつーもんだろ？』（広梳）
『まあ、光治君のは気まぐれっぽいけどね。』（明）
『おいっ！』（光治）
『それとも刹那さんとどーゆう関係があるのか知りたいだけだったりして。』（舞）
『どつくぞ、おまいら。』（光治）
『まあ、こいつらはともかく、信じてみても損はねぇと思うぜ。』（広梳）
『…。ありがとう。わかった、君らを信じよう。実は…彼らは宇宙人なんだ。』（光明）
皆、その言葉を理解するのに数秒かかり、最初に口を開いたのは光治だった。
『はぁ？俺達は真剣に取り組もうとしてんのに…』（光治）
『信じないのも無理ない。でも彼らは憑依型の宇宙人みたいなんだ。その証拠に彼らは尋常ならざる能力を持っている。』（光明）
その言葉に、舞以外の皆が反応した。
―刹那〔ちゃん〕の回復能力！！―（広梳、明）
―花月の圧倒的な力！！―（光治）
『で、どうやら刹那は女の宇宙人みたいだ。変わると女の体型になるから。』（光明）
『どういうこと？』（舞）
『うん、今から説明するけど、例えば、刹那は体も女だけど、僕は男だ。つまり、体も人格も別々だけど一個体として共存している。もう少しわかりやすく言うと、この世界にいられるのは花月、刹那、光明のうち一人なんだ。だれか一人が体を手にいれ、行動できる。

刹那か花月が行動している時は意識は刹那か花月とともにある。
だから念話もできる（今までしたことないけど）。問題は奴らは勝手に入れかわりをする、と言う点なんだ。奴らは勝手にでてくる。元々は僕の体だったのに。こんな事になったのは二年前からなんだ。だから、彼らに言って欲しい、勝手に入れかわるなって。さっき名前（花月や刹那）を呼ばれただけでも奴らがでてきそうになったんだ。お願いするよ。』（光明）
『わかったわ。』（舞）
『入れかわりについては…見てもらった方がはやいな。じゃあ、刹那にかわるよ。』（光明）
ヒュン。
光明がいた所には刹那がいた。彼が彼女に入れかわったのはまさに一瞬のことだった。
『刹那…ちゃんだっけ？光明君が花月にもだけど、勝手にでてこないで欲しいって。』（舞）
『主人が！？わかりました。しかし、花月がうんというでしょうか？』（刹那）
『ちょっと待ってよ、意識があるんなら刹那さんは今までの事知ってるんじゃないの？』（明）
『確かにそのとおりですが、主人はいつも私達の意識をきっているのです。』（刹那）
『なるほど。』（広梳）
『さっき言ってた花月がうんと言わないっつーのは？』（光治）
『花月は非常に自我が強いんです。自分より下等な奴に従う理由はないと考えてる。だから…。』（刹那）
『じゃあ、花月に光明を認めさせればいいんじゃないか？』（光治）

光明編その5

『なるほど、その手がありましたか。しかし花月はすごい運動能力…というより戦闘能力なので並大抵のことでは認めないと思います。』（刹那）

『頭で認めさせるとか。』（明）

『う……ん、主人はそれほど頭いいわけではありませんし、…花月もそれは重々わかっているはずです。』（刹那）

『戦闘能力で花月を上回る、これしかねぇ。』（光治）

『それだと確かに認めるでしょうが、不可能だと思います。花月の戦闘能力は生半可なものではありません。一夜にしてヤクザの組を一組、一人で潰してしまうほど強大なものです。』（刹那）

『花月にとっては弾丸でさえ、止まって見えるそうです。』（刹那）

『うへぇ、バケモンだ。』（舞）

『うつてなし…か。』（広梳）

『もう日も暮れそうですし、又今度にしませんか？』（刹那）

『そうだね。』（明）

…という事で今度また話し合うことになった。

そのすぐ後に光明にどうだったときかれたが、刹那はともかく、花月が…というと、そう…と悲しい顔をしてさって行った。

その後、花月を認めさせればいいという事を光明に伝えた。

この夜、光明は初めて念話してみた。

―花月、花月―（光明）

―なんだ、クズ―（花月）

―僕がお前より上回る事があったらもう二度と勝手にでてこないと約束しろっ―（光明）

―いいだろう、だがお前のようなクズにそんなもんがあるのか？―（花月）

―あるっ！―（光明）
―なんだ、言ってみろ―（花月）
―僕の趣味は花だ。花の知識に関しては誰にも負けない自信がある。―（光明）
―くだらねぇ。花の知識が生きるのに何の役に立つ？だからテメェはクズなんだよ。―（花月）
―……。（…もう、どうしようもないのかっ。いや、花月を変えてみせる。）―（光明）
これで念話は終わった。

三日後の夜、夜ふけに光治はぶらりと外に出た。そこで…
―ドンッ―、花月が現れた。
『よう！』（花月）
『クッ。』（光治）
『また会ったな。』（花月）
『お前は…花月！！』（光治）
『どうしたんだ？こんな時間に。この前は俺をみてふるえていたカスがっ！』（花月）
『頼むっ！光明の意志にさからってでてこないでくれっ！』（光治）
『そいつはできねーな。』（花月）
『あいつはこの三日、お前を超えるため努力していた。お前は見れないだろうが、あいつの体は傷だらけだ。』（光治）

光明編その6

『フンッ、そんなこと知ったこっちゃねぇ。ようはあいつが俺に勝るものがあるのかどうかって事だ。男の約束に唾をつけるとはお前もそうとうのカスだな。』（花月）
『……。（こういう事はあいつのためにならないってわかってる。でもあいつの頑張りにこたえてやりたいんだ。）』（光治）
『だがっ…』（光治）
『黙れ！！カスッ。これ以上ガタガタぬかすと殺すぞ！！』（花月）

そう言って花月は去って行った。
『…。』（光治）

そして次の日
『今なら花月に勝てるものがあるよ。』（光明）
というので、放課後、部会で集まった。
『いったい、何ができるというんだ？』（広梳）
『いいからみてなさいよ。』（舞）
『それはこれだ！』（光明）
『そっ、それは。…縄跳びじゃねえか。』（光治）
『だ、大丈夫。きっと認めてくれるよ、ね、光治君。』（明）
『……。』（光治）（顔をそむけた）
『いいから見ててよ。』（光明）
光明は二重跳び、二重あや跳び、後ろ二重あや跳び、と順にしていった。
『どう？』（光明）
『……』（光治、明、広梳）
『ま、まあ、花月はできないかも知れないし、代わってもらいましょうか。』（舞）

…そして、
『俺はクズの中で一部始終をみていた。あんなもの、やる必要もない。』（花月）
―逃げるのか？花月―（光明）（念話）
『なんだと、俺様が逃げるだと？ハッ、そこまで言うなら俺様に勝てる算段はあるんだろうな。いいだろう。のってやる。』（花月）
―上手い。うまく自分の土俵にのせた。―（舞）
『やるのね？』（舞）
『ああ。』（花月）
『本当にやるんだな？』（広梳）
『くどいっ。』（花月）
『（やったね。これなら勝てるかも。）』（明）（光治に向かってのひそひそ話）
『（いや、たぶん……。）』（光治）
『フンッ。』（花月）
花月は縄跳びをもつと、部屋の天井につきそうなくらいジャンプし、光速で縄跳びをまわし始めた。そして着地した時には皆ポカーンと口をあけたまま動かなかった。
広梳は口にくわえていたタバコを落としていた。
『俺が見ただけでもご、五重跳び以上はしていたように見えた。』（広梳）
『八重跳びだ。』（花月）
『八重跳び！？？？？？』（舞）
『あ、ありえない。』（明）
『…人間では勝てる奴はいねぇような気が。』（光治）
『これでも俺様はかるーくやったんだ。わかったか、これが俺様とクズの差だ。わかったら二度と俺様に指図するな。』（花月）

光明編その7

『だいたいクズがどんなに努力しようとクズはクズなんだよ。勝負など、する必要もなくわかっている事だ。』（花月）
―思い知ったか、クズ。しょせん、お前が俺に勝てるものなど、一つもないんだよ―（花月）
―うっ……―（光明）
『あんたに光明君の何がわかるってゆうのよ。あんた、努力したことあんの？光明君はボロボロになるまで努力して……。』（舞）
『そうだ。勝負には負けたが試合に勝ったのは光明の方だ。』（光治）
『ハッ、しょせん、たわ言。』（花月）
『わからないのかい、花月、できるだけ努力して勝負に挑んだ光明君と自分の才能を過信して勝負したお前の差が。』（明）
『そう、花月。お前は生命体として光明に負けているっ！！！！！！』（広梳）
―みんな……―（光明）
『ぐうっ！！！何だと。認めん。俺は認めんぞ。ハッ。（何かきずいた）』（花月）
―なるほど、人望…か。それは俺にはねぇもんだ。わかった、認めてやるよ。お前を主として、な。―（花月）
―花月。―（光明）
『わかった、認めてやるよ。こいつ（光明）を。』（花月）
『ほんと？もう勝手にでてきたりしない？』（舞）
『ああ。』（花月）
『本当に、だな。』（光治）
『だから、テメーらはくどいんだよ。』（花月）
『やったあ。』（明）
『みんな、ありがとう。』（光明）↑元に戻った。

『いいって事よ。ところで光明、たぷ友好会に入らねぇか？面白いぜ。』（光治）
『う～ん、君らのおかげで助かったしね、入るよ。』（光明）
『じゃあ、よろしく。』（光明）
『よろしく！！』（舞、明、光治、広梳）

デイリーライフ―光明のいない日

『あれ？ここにガルガル君なかったか？』（拓也）
『ああ、あのアイスのこと？あれなら、拓也君の後ろにいる光治君が持ってったよ。』（明）
後ろを振り向くとニンマリ顔をしたあの、アホがいた。
『光治…まさか、お前……。』（拓也）
よく観ると、アホの唇のまわりにガルガル君のチョコがほんの少しだが、ついている。だいたい、部室にガルガル君〔アイス〕を持ってくる奴はいない。俺以外。そして、きわめつけにあのアホヅラッ（怒）（怒）（怒）。
拓也は確信した。
『あのガルガル君は俺に食われる運命だったのさ。』（光治）
その一言で、キレた。
『殺すっ！！！』（拓也）
こうして拓也と光治の取っ組み合いが始まった。
その様子を観戦している三人がいる。
『……拓也君、変わった？』（舞）
『そうかもね。』（明）
そういいながら、明はクスクス笑っている。
『…というより、拓也君に光治が持ってったって、言わなきゃよかったのに。』（舞）
『無駄だ。あいつらは言わば、炎と水、水と油、油と…、いや、プラスとマイナスの関係だ。言わなくてもそうなってた。』（広梳）
ホッ、と明は罪悪感から安堵のため息をついた。
『なんか、最近、あの二人仲いいわよね～。』（舞）
―何、何、舞さん、光治君がとられたようで悲しいの？―
と、明は言おうと思ったが、恐いので止めた。
…が、その止めた事を広梳は恐いもの知らずのように口に出す。

『なんだ、お前、光治がとられて悲しいってか？』（広梳）
『なっ訳ないじゃない。…私には、好きな人がいるし。最初、あんなに仲悪かったのにって意味！』（舞）
強く否定したのは、本気の証なのだが、そこを分かっていながら、なお、からかう。
『すぐに否定するのが、なお、怪しいな。』（広梳）
『顔が赤いよ、舞さん。』（明）
つい、楽しくなって自分も参加する。
『明君まで…。』（舞）
弱さをみせるとかわいいと思うお二人だった。いつものギャップからだろう。
顔を下に向けたかと思うと、顔を赤らめながら（僕〔明〕は勘違いされた恥ずかしさからだと思う）、真っ直ぐ二人を見て、しゃべる。
『広梳、明君？あんた達、あたしを相当怒らせたいらしいわね。』（舞）
そして、普段の彼女に戻る。
『ごめんなさい。』（明）
僕は―しまった―と思い、速攻あやまる。

―チッ、ここまでか。―
と広梳も断念し、悪ぶれるつもりもなく、
『悪かったな。』（広梳）
とだけ言った。

その間にもまだ二人は喧嘩？のようなものをしている。実力的には光治が上、だが、光治は拓也に勝てない。拓也は他の誰もが手に入れようとしてもできない、唯一の最強の武器を持っていた。
センスである。直感ともいいかえられるこの武器は拓也にとって、唯一にして最高、最強の武器だった。
そんな訳で、光治はパンチをうってもよけられ、カウンターをいれ

られる。そして投げようとしても逆に投げられる始末だった。
『もう、いい加減、諦めたらどうだ？ガルガル君二個で許してやる。』（拓也）
『まだまだ…。』（光治）
光治は拓也が手加減しているので血こそでてないが、ボロボロだった。
拓也はそんな光治を見て、
―これがこいつのアホたるゆえんだな―
と、思い、あわれに思う。そんな拓也の顔を見て、光治はさらにヒートアップし、殴りかかる。
その時、キーンコーンカーンコーン。部会終わりのチャイムがなった。
『チッ、もう少しでの所で…。』（光治）
光治は汗を多量にかいていた。
拓也は受け身なので、あまり汗はかいてないが、別の意味で汗をかいていた。
―あ、危なかった。今のアホのパンチは受け身で手加減できるものじゃない。カウンターしてたら、奴は…―
とまで考え、いや、病院送りで学校が静かになるだけか、と考え直す。最後にそれもよかったかもな。と付け足す。

こうして、事件のない日のたぷ友好会の一日は終わる。

デイリーライフ―光明のいない日（後書き）

今回は拓也が仲間になった、前話より少し後の話です。人が多いと書きにくくなるので、光明はその日、熱で休みということにしました。今回抜いた分、いつか大活躍させたいと思います。
もちろん、拓也のエピソードもいつかは書くつもりですのでこれからもよろしくお願いします。
ちなみに次は光治の過去の話です。知られざる秘話が今！なんて…。
あとでたたかれそう。

メモリーズオブ光治（1）

放課後のミーティングも終わり、みんながガヤガヤさわいでいる。聞こえる共通のキーワードは”体育祭”。

『体育祭？何だ、それ？』（光治）

明は呆れた顔で話す。

『光治君、ミーティングで居眠りするクセなおしなよ。』（明）

そして、一息ついてからめんどくさそうに話す。

『体育祭ってのはつまりね、小中学校でやった運動会みたいなものだよ。まあ、内容は小中学校のような遊戯と違って、本格…わっ。』（明）

光治の机の正面にいすで座っていた明は横からいきなりきた、人影に驚いた。

『そう、”体育祭”はこれまでのような、お遊びじゃない。本格的なスポーツで、純粋な魂と魂のぶつかり合いなのよ。そんなエネルギーの固まりのような奴が、話し聞かないで、どーすんのよ。』（舞）

半ば、怒っているようにもみえる。が、光治は関心なさげに、

『へー。』（光治）

とだけ言う。実の所、光治は本当に関心がなかった。光治が関心あるのは同じ魂のぶつかり合いでもボクシングや、プロレス、といった、もっと過激なスポーツの方だった。幼少のころから喧嘩ばっかしてきた彼にとっては仕方がないことだといえる。

光治はサッカーや、テニスといったスポーツは、―あんなの遊戯と変わんね―と、馬鹿にしてさえいた。

まあ、体育は5以外の評定をもらったことがないことからしても彼の運動能力の高さはうかがえる。

『やる気ないわね～。自覚してんの？あんたがやる気なかったら、私達のクラス全体の指揮も下がっちゃうんだからね。』（舞）

『あ〜、わーってるよ。』（光治）
分かったふりだけはしている。
明は首を横に振る。―今回は…駄目かな。―と思い、諦める。
ここで、いい加減、協調性のない光治に対して苛立ちをおぼえていた広梳はついに、切り札を出す。
『光治、お前、恐いんじゃないか？』（広梳）
無関心だった光治が、反応するように光治の左眉がぴくりと跳ね上がる。
『あ？何がだ？』（光治）
平静を装っているつもりらしいが、声はうわずっている。
『負けることにだよ。』（広梳）
『誰に。』（光治）
今度は両眉をピクつかせている。やはり、怒っているらしい。
『芦来河や、』（広梳）
―奴には一度勝ってるし。―
『花月、』（広梳）

メモリーズオブ光治（1）（後書き）

テニス、サッカーをしているみなさん、ごめんなさい。

メモリーズオブ光治（2）

―あいつには勝てないこともわかりきってるし、光明が制御してるからかってに出てきはしないだろう。―

『拓也、とか。』（広梳）

―奴が、奴が、なんだってんだ！―

光治は自らライバルだと思っている男に一度も勝ったことがないことに対して劣等感をおぼえていた。その男にまた負けるのが恐い、と言われたことに対して、以上な反応を示した。

『ウォォォォ、奴がなんだってんだ、らっしゃぁぁぁぁ、やってやろうじゃねーか。俺が、奴に勝てばいいんだろ？』（光治）

そのクラスにいたみんなが光治の狂いざまにビクッとした。

小学校まで一緒にいた広梳でさえたじろいた。

『あ、ああ。だが、あいつは強い。必ず決勝辺りにはくるんじゃないかな。』（広梳）

『わかってる。』（光治）

そう言って、いきなり立つと、鞄を持って、クラスを出て行った。

『良かったんだか、悪かったんだか…。でも一応感謝はしとくわ。ありがと。』（舞）

『いや、俺もただ本気のあいつを見たくなっただけさ。…でもあの時、確かに昔のあいつに戻ってたな…。』（広梳）

『昔の…光治君？なんか興味あるな。』（明）

『やめとけ、あいつは過去を詮索される事を極端に嫌がる。』（広梳）

『まあ、簡単に言うと、昔はグレてて気に入らないものはたたきつぶす一匹狼だったってわけさ。』（広梳）

『光治君にそんな過去があったなんて。』（明）

『へ～、光治もいろいろあって変わったのね～。』（舞）

『変わったのは中学校時代の親友のおかげって言ってたけど、詳し

くは…。』（広梳）
『なんか、興味が湧いてくるのよね。』（舞）
『僕も。』（明）
『明君、光治の過去を探ることで、一緒に手を組もっか。』（舞）
『いいね。』（明）
『おまえら……』（広梳）
―さっき、警告したばかりだろうが―と言おうとしたが、呆れて何も言えなかった。

……咲（さき）。なんで、なんで、お前はっ！！！
帰り道、光治は悔やんでいた。過去の事で。先程、光治が異常反応を示したのは”拓也”の事を言われたからだけではない。この時期も関係していた。この時期が光治を余計に感情的にさせていた。
中学2年の夏、光治は彼女に会った。あれは…今年のように、真夏の日。

光治はいつものように学校を休んでいた。正式に休む手順をとったわけではなく、サボタージュ、いわゆる、サボりをしていた。何するつもりもなく、公園に向かって歩く。

メモリーズオブ光治（3）

途中で近くの人が光治を見ていた。当たり前だ。光治は制服をきているのだから。光治は視線を感じ、その方向を見る。だが、視線は通じることがなかった。片方がすぐそらしたからである。光治の見るは、ガンをつけると同義語だった。

―チッ。―

光治は苛立っていた。いつもどうり、くだらない毎日に。そして公園に着く。公園に着くと、光治とは異なる学生がたむろしている。その学生の一人が光治にきづく。

『お～う、こうちゃん、ひっさしぶり～。』

言葉だけみれば、友達のあいさつにもみえるが、悪意がこもっていた。

そして彼ら三人は立って、光治のまわりをぐるぐるとまわる。

『蝿がっ！』（光治）

『あ～ら、ごあいさつだねぇ、こ～うちゃん。』

光治はまず、さっきからリーダーのようなそいつを殴る。そいつは一発で倒れた。その後も光治はそいつだけを殴る、蹴る、殴る、蹴る。もう、そいつは血だらけで、顔も修復不可能なまでにボコボコだった。

光治はそいつ以外は殴らない。むかついたのは、そいつだけだから。

『お前らもこうなるか？』（光治）

だらん、となったそいつを持ち上げて、残りの二人に見せる。

『うっ。』

『うっひゃあ。』

とか言って、残りの二人は逃げる。

―弱いから、つるむんだ。つーか、毎日、毎日、よくまあ、やられにやってくるもんだ。―

実の所、光治が喧嘩をしかけられるのは、ほぼ、毎日と言ってよか

った。しかも毎回違う人物が…である。そして光治の名もそこいら一帯にまで広がっていた。悪名として。
残った奴を光治はひたすら殴り続ける。手加減など、しない。いつものように、命のぎりぎりの所まで、痛めつける。こいつの一言、基、いつものうっぷんをはらすように。
その時だった。彼女が現れたのは。
急に光治と殴っている奴の間に体を滑りこませるように入ってきたのは、光治とおんなじ位の歳の女の子だった。…制服ではなかったが。
光治は驚いた。驚いて、奴に叩き込むはずのパンチを女の子に当たる前に止めた。
その女の子は目を閉じている。光治は驚いて物も言えない。
女の子はゆっくりと目を開き、震えた声で、こう言った。
『駄目っ！』
―はっ？―
光治は意味がわからず、しかし、状況把握しようと頭を巡らせる。
―……こいつの兄妹ってトコか？―
と推理する。
―しかし、よくもまあ、体張ってまで……―

メモリーズオブ光治（4）

『おい、女。どけっ。』（光治）
光治はその女の子にもガンをつける。
だが、女の子は全身が震えているにもかかわらず、どかない。そして、また
『駄目っ！』
と言った。
雑魚なら、光治にガンをつけられただけでも逃げる。それが、普通の、しかも女の子にここまでされたことに怒りをおぼえる。
『もう一度言う。どけっ、どかないと、お前を殴って、こいつも殴る。』（光治）
光治に目を合わせないようにして、女の子は言う。
『じゃあ、私を殴ってもいいから、この人はもう殴って駄目っ！！』
光治は
―弱ったな。―
と思った。
光治にはこの女の子を殴る理由がないのである。もともとムカつく奴だけを殴ってきたので、この子を、しかも女を殴るわけにはいかなかった。確かにこの女の子にもムカつきはしたが、女、しかも理由のない奴を殴るのは光治のプライドが許さなかった。そして、何より、こんなことは初めてだった。
『アニキをかばうのはわからなくもないが（実際わからない）、俺はこいつをもう俺に歯向かえないぐらいに痛めつけないと、こっちがやられるんだ。』（光治）
女の子はまだ震えている。そして言う。
『この人は、アニキでも家族でもないっ。』
『はあっ？』（光治）
つい、声にでた。

―こいつ、馬鹿なのか？―と思い、聞いてみる。
『じゃあ何でそいつを守るんだよ。』（光治）
前より口調も優しくなる。女の子の方はさっきよりも強い口調で言う。
『やり過ぎだよっ！！この人、可哀相。』
『だから自分が犠牲になってもいいってことか？』（光治）
女の子は強く言う。
『うん！！！』
―なんなんだ、この生物は？理解不能だぜ。これだから人間って奴は。―
光治は”人間”という種族が嫌いだった。自分勝手で何を考えているかわからない、これが光治の人間に対する定義だった
それでもなお、光治は説得？を試みる。
『でも俺はこいつを痛みつけないといけねぇ。でないとこいつはまた、歯向かってくる。』（光治）
『駄目っ！！！』
光治はキレる。
『何がダメなんだっ。こいつをやらなきゃやられるのは俺なんだ、やるか、やられるか、そういう世界なんだよ。』（光治）
『それでも駄目っ。光治君は負けないよ。私、知ってる。光治君は他の誰にもない優しさを持ってる。それさえあれば、人を変えられる。ただ、それを強さ、いや、暴力で隠してるっ。もったいないよ！！』

メモリーズオブ光治（5）

『何の話だ？』（光治）
『私、この前見たもの。君が、この前、不良達がネコをいじめているのを助ける所を。…そのネコは結局、死んじゃったけど、君は立ち尽くして涙をながしていた。そして、地面に埋めて埋葬した。そんなことは普通の人はしない。涙も流さない。君は本来は優しい人だよ。』
―なっ！！あれをみられていたのか！―
光治は生まれて初めて顔を赤くした。
『あっ、あれは…俺ん家のペットだからだよ。』（光治）
『あははっ、そう。』
―やっぱり、みかけどうりの人じゃなかった。―
女の子は先程までの様子は全くなくなっていた。
―何で笑ってんだよ。―
光治は話を反らすように別の、しかし不思議に思っていたことを口に出す。
『なんで俺の名前、知ってんだ？』（光治）
女の子は即答する。
『だって、君は、”赤色の悪魔”の異名で有名じゃん。』
『あっ。』（光治）
当たり前といえば当たり前である。ここいらで光治を知らない奴はいない。ちなみに”赤色の悪魔”は相手を容赦なく倒す光治はかえり血で全身濡れることと、殴っている時の凶暴な顔付きからつけられた異名である。
…光治は参っていた。
先程からの話の後、最初の話にもどしたが、どうも噛み合わない。会った当初のような怒気はすっかりなくなっていた。
『だから、こいつをやらねぇと俺は、…』（光治）

『この人を殴るんだったら、私を…』
会ってから、かれこれ４０分が経過していた。
―バツがわりぃ―
光治はめまいでもしたかのように額に手をあてる。
このままじゃ話が通じん、と思って交換条件を突き付ける。
『じゃあ、こいつは殴らない。』（光治）
―わかってくれたんだ。―女の子はこれでもないくらい嬉しそうな顔をする。
『代わりに蹴るっつーのはどーだ？』（光治）
女の子の顔はさっきより哀しみの色になる。
哀しさ半分、笑い半分で、
『そんなの変わんないよっ。』
と言う。
そして３０分後、光治が根負けした。
『わかったよ。今日は運がわりぃ。』（光治）
『運がいいの間違いだと思うけど。』
『はいはい。』（光治）
そう言って帰り道を歩く。女の子はついてくる。
―俺を言葉で負かすなんて…な。―
光治は負けはしたが、気分は悪くなかった。むしろ、良かった。
『お前、名は？』（光治）
『咲。（さき）』（咲）
『そうか。』（光治）

メモリーズオブ光治（6）

そうして、その日は帰った。
次の日、また学校をサボり（というより、行く日のが少ない。）、公園に向かった。珍しく不良はいなかった…が、咲がブランコに乗っていた。
光治はぶっきらぼうにあいさつといえないあいさつをかける。
『お前、学校は？』（光治）
『私、病気なんだ。だから、学校にも行ってない。』（咲）
『そうか。』（光治）
『それよりさ、名乗ったんだから、名前で呼んでくれない。』（咲）
『なんでだよ。彼氏彼女の関係じゃあるまいし。お前はお前だ。』（光治）
『ちぇっ。』（咲）
そして、話してみると咲はなんとも妙な人種だった。肉や魚はくっていると言っているのに、命を殺すな、傷つけるな、というし、喧嘩を売られても買うなというし、世界の事を分かっていない、純心な少女に思えた。矛盾だらけだし、わからないことだらけだが、そんな彼女を光治は好きになった。
『光治君、私はね、優しさは人を変えることができる、と思う。悪い方向じゃなく、いい方向に。』（咲）
『無理だな。』（光治）
『どうして？』（咲）
『自分を変えることができるのは自分だけだ。他人に何を言われようが、されようが、変えるのは自分自身だ。』（光治）
『ん～、例えば、私が町のゴミを拾う習慣があったとする。』（咲）
『何だ、そりゃ。』（光治）
『いいから、聞いて。』（咲）
『それをみてたら、光治君もゴミを拾う習慣ができた。これはどう

思う？』（咲）
『どうもこうも、ただ、お前がゴミを拾うのをみて、つられて”俺”が拾おうと思っただけだろ？』（光治）
『でも私がゴミを拾わなかったら、光治君はそんなことしなかった、でしょ？』（咲）
『ん…む……まあ。』（光治）
『つまり、そういうこと。どっちも正しいってことだよ。』（咲）
―そういうことなのか？―光治は疑問に思う。

『咲、お前さ、』（光治）
『あっ。』（咲）
光治は照れる。咲も照れる。
『うるさいっ。いいから話を聞けっ。』（光治）
『うん。』（咲）
『優しさを配ってるって言ったよな。』（光治）
『うん、それが？』（咲）
『悲しくならねぇか？ギブアンドテイクならともかく、ギブだけなんてよ。』（光治）
咲は偉そうに言う。
『ふ、ふ、ふ、あまいな、光治君。優しさは見返りを求めちゃいけないのだよ。』（咲）

メモリーズオブ光治（7）

『そーゆうものなのか？』（光治）
『そーゆーものなの。』（咲）

そうして話してるうちに夕方になり、帰り道を歩く。
『バイバイ、光治君、またね！』（咲）
『おう。でもあまり公園には行くな。物騒な奴らが一杯いるからな。』（光治）
『光治君もその一人。』（咲）
『そーゆーこと。』（光治）
じゃあないよ。と咲はつけたしたが、光治には聞こえなかった。

そして、最期の日が訪れる。
二人にとって。

その日、光治はいつものように公園に向かった。
…すると、やはり、ヤンキーが三人程いた。
その中のリーダーヅラが喋る。
『お前が”赤色の悪魔”か？』
『そうだ。てめーらは何のようだ？』（光治）
光治はそう言って殴りかかろうとする。
『さっき、公園に可愛い女の子がいたなぁ』
…が、この一言で止められる。
『なんだと！？』（光治）
光治は動悸が激しく鳴る。
―ま、さ、か……。いや、こいつらが咲のことを知っているはずが…。はっ。もしや、一昨日ボコにしてやった奴が？あいつは確かに気を失っていたっ。

…もしかしてフリをしていた？クソッ。だからあの時しとめておけばよかったんだ！！何より、あいつには公園に来るなと言ったのに！！！―

敵はその事を盾に光治をいたぶろうとしてたらしいが、光治には、そうだと気付く余裕がない。速攻、そいつらを動けない体にした。

そして、聞く。

『その女の子をっっ、咲をっ、どうしたっっっ！』（光治）

リーダーヅラが答える。

『クック、さすがはレッドデビル、話も聞かずに殴るとはね。』

一発殴って黙らせる。残り二人にもう一度聞く。

『さあねぇ？俺達をこれ以上殴ったら、…ククク、ど』

この時点でハゲもノックアウトになる。

最後の一人にこれまでないほどに真剣な顔をして聞く。その顔を向けられた気の弱そうな男は、猛獣にでもあったかのような顔をして、助けてください、助けてください、と言っていたが、やがて、

『伝言があります。』

と言って、話し始めた。

『海関防波堤までこい。だ、そうです。』

光治はこの前のようなヘマはしない。全員完全にノックアウトさせて、海関防波堤まで走る。

メモリーズオブ光治（8）

―咲っ。―
たった二日前に会った少女、その事だけを考える。
―咲っ、どうか無事でいてくれ。―

そして、目的地に着くと、この前の奴がいる。３０人程の子分を連れて。
『よう、”赤色の悪魔”、遅かったな。』
『やはり、二日前の…、お前か！！咲をどこにやった！！！』（光治）
『ま～あ、そう急ぐな、お目当ての嬢ちゃんなら』
そいつは体を横に反らした。すると、後方に咲がさるぐつわのようなものを噛まされて、両手も縛られ、立ってムームー言っていた。
『ほら、ここにいる。』
『テメェら全員、三途の川拝ませてやんぜ！！』（光治）
と、言いつつ、正直、光治は―これはまずいかもな―と思っていた。雑魚とはいえ、人数が桁違いだ。
とにかく、咲を救うため、奴らに突進していく。奴らは光治を中心に囲っていく。ここから光治はサンドバッグだった。咲のことだけを考えて他に何も考えない。そのせいでいつもの半分の力もでていない。奴らは以前に光治にやられた事をそのまんま仕返す。
光治は蹴られ、殴られ、転がされる中、奴らの間から、泣いている咲を見た。
しかし、何もできない自分を呪う。
―ゴメン、咲、偉そうにでてきたけど、助けられそうもない―
そして力つき、目を閉じる瞬間、光治の目は開かれた。
『駄目っ！』（咲）
この声が聞こえたからである。咲はいつのまにか、さるぐつわを外

していた。
（両手はそのままで）
その声に反応したのは光治だけではなかった。
『おうおう、かわいいのう、ねーちゃん。』
『ヒャハハハハ。』
『だめー、だってよ。かわいがってやるか』
全員、光治には関心がなくなったかのように、咲の方へ行く。
光治はこいつらの言っているように本当にかわいがってやる為に咲の方へ行ったのではないと理解していた。
その瞬間、光治に力がもどった。目に光りが、爛々と輝く。逃げる者もいれば、かかっていく者もいた。
かかっていく者は少数で、数人だったが、光治はいつものように軽くいなす。そして、殴る、蹴る、殴る、蹴る。”赤色の悪魔”の降臨だった。
リーダーヅラが吠える。
『チッ、こうなったら、俺自らが』
そう言っているうちに光治はボスヅラを全力で殴っていた。ボスヅラも倒れた。…が、倒れる前に後方に合図を送っていた。光治は後ろを振り向く。

メモリーズオブ光治（9）

振り向くと、さっき逃げた者がもどってきていて、全員が光治にナイフを投げていた。気付いた時には必殺必中の位置にいた。よける術もない、もう間に合わない。
その時だった。咲が二日前と同じように体を滑りこませてきた。咲の背中には無数のナイフが深々と刺さる。それからの1分程度の記憶はない。気付けば、奴らは全員倒れていた。
そして、光治は咲のもとにもどる、何かを、一生懸命喋ろうとしていた。光治にはかろうじて聞こえた。
『ごめんね。ありがとう。』（咲）
そして、目を閉じた。
『なんで、お前が謝らなきゃなんねえ、ウォォォォォ。』（光治）
光治は泣いた。が、立ち尽くしている暇はない、咲を優しく抱くと、走った。走って、病院まで連れて行った。…が、手遅れだった。薄幸の少女だった。光治はその晩、ずっと病院にいて、泣きつくした。

そして翌日、公園に言ってみる。咲がいるような気がして。しかし、いない。代わりにヤンキーがいた。いつも以上に激しく痛めつける。

その翌日、光治は病院に行った。
―確か、ここで、ネコを助けたんだっけな。…死んじまったけど。―
光治は苦笑する。
そして建物を殴り、泣く。
『いつも、いつも、こうだ。助けたいものを助けられない。俺は…無力だっ。』（光治）
光治は叫んだ。
『咲ぃーーーーーーーーー。』（光治）
そのあとすぐに、声がした。

『あのっ、もしかして、光治さん？』
振り向くと４０歳ぐらいの女性だった。
光治は話を聞いてみることにした。
話を聞くと、彼女は咲の母親だと言うことがわかった。そして、
『咲は…病気で、入院してたんです。』
『はい、それは聞きました。』（光治）
『病名は、言ってま…せんよね。』
『ええ。』（光治）
『三年病です。』
『三年病！？』（光治）
『知らないのも無理はありません、謎の奇病なのです。もちろん、治療らしいことはしますが、ほとんど、効果はありません。』
『そうですか…。』（光治）
『三年病の怖いところはかかってから、三年で、きっかり死ぬと言うことです。…そして、その最期の日が、二日前、つまり、ナイフで刺された日だったのです。』
『えっ！』（光治）
『あの子は、優しい子でした。どうせ尽きる命なら、貴方の為に使いたかったのでしょう。』
光治はショックを、頭をハンマーで殴られたようなショックを受けた。

メモリーズオブ光治（１０）

―咲が？俺を助けなくても死んでいた？そんなばかなっ。―
そして、咲の母親はまだ口を休めない。
『実は、貴方宛ての手紙があります。いつ書いたのかはわかりませんが…。これを。』

…そして、その手紙を貰って、少し咲について話したあと、咲の母親とは別れた。
家に着いて、光治は咲の手紙を開けてみる。

―こんにちは、光治君。今日が最期の日です。でも光治君がこれを見るころにはもういないと思うから、これは天国からのメッセージかな？私が突然いなくなって、驚いたかもしれません。ごめんね。
実は―この後は病気の事が書かれていた。―
ネコを助けている光治君を見たのは、実は病院の中で入院している時だったんです。その後光治君を見て、寂しそうに思えた。強そうにみえて、実は誰よりも弱い人にみえた。だから、変えてあげたかった。
素直な君に。
本来の、強い君に。
光治君と話した日ははっきり言って、楽しかった。自分でも驚くぐらい。
最期に、光治君に暴力なんて似合わない。だから、もっと優しく、素直になって。
そうすれば、きっと、かっこいいから。
そして、今度は光治君、君が他の人を変えてあげて。君ならできるよ。君の優しさなら…。
最後に、好きだったよ、光治君。

あとのあつい気持ちは公園についてから、ということで。これまでっ。バイバイ、光治君。―

『くっ、咲、咲～～～～～～、俺も好きだった、そして、俺は変わった、今、変わったんだ～～～。』（光治）
光治は叫ぶ、天にも届くような声で。

それから、光治は転校する。思い出を残して。
”赤色の悪魔”と”咲”
二人は死んで、新しい一人が生まれた。
和田、光治。
本作の主人公の始まりの物語。

今、光治は咲の墓の前にいる。
―咲っ、なんで、なんで、お前は死んでしまったんだ。―
声がかえってきたような気がした。
―元気だして、光治君、私は元々、そういう運命だったし、今、君には仲間がいるでしょ？ほら、後ろに。―
後ろには舞、明、広梳がいた。
『なっ、お前ら、ついてきて…。』（光治）
『何言ってんの、僕ら、光治君が自殺でもするんじゃないかって心配だったんだよ。』（明）
『そうそう、心配して損した。』（舞）
『気がすんだか？』（広梳）
広梳からみた光治の顔は以前とうってかわって晴々（はればれ）していた。
『ああ、帰ろうぜ。』（光治）
―君には、私の加護があるから。―
最後に聞こえた（気がした）その言葉は光治を元気づけた。
―ははっ、頼むぜ、俺の女神様。―

『運動会でも俺らが1番だぜっ。』（光治）
『…体育祭だって。』（明）
『どっちでもいいじゃねーかよ。』（光治）
『馬鹿ね』（舞）
『なんだと。』（光治）
『同感。』（広梳）
『おいっ、お前までっ。』（光治）

こうして話は続いてく。家に着くまで。
夏の暑さは思い出を残す。乗り越えなければならない、そして、乗り越えた思い出を。

メモリーズオブ光治・完

番外～体育祭編

ドンッ、パンッ、パンッ。体育祭決行、という合図がなる。これだけは小学校のころから変わらない。
光治と明は学校に向かって歩いていた。
『よっしゃー、今日こそ、奴に勝つにふさわしい体育祭日和だぜ！』（光治）
『あの拓也君にかい？』（明）
『おうよ、今日こそあの野郎をケッチョン、ケッチョンのグッチャ、グッチャにしてやるぜ。』（光治）
『…よく意味がわからないけど、光治君、君、悪役になってるよ。』（明）
そうしているうちに学校に着く。そこに待っていた、舞が来る。
『おっそーい。あんた達、遅れた罰として今日は存分に使わせてもらうからね。』（舞）
『…、僕は光治君につきあっただけなのに。』（明）
『わかったわ。じゃあ、光治一人を…』（舞）
『おわっ、明、てめー、抜け駆けする気か。』（光治）
『問答無用。体育祭実行委員として、あんたを雑用に任命するわ。』
まわりのクラスメイトがクスクス笑っている。
『そりゃねーって。』（光治）
舞は忙しそうに、どこかに行った。
明は舞が行くのを確認してから憎々しくこう言った。
『こういうのは早いもの勝ちなのだよ、光治君。』（明）
運動場はすでに人が集まっており、ガヤガヤしていた。そこに校長のあいさつが始まる。
『え～、今日という日は快晴ということもあり……』
どうやら、長びきそうだ。次に選手宣誓、
『僕たち、

私たち　は、～～するこ
とを誓います。』
光治は、
―あ～、やっぱ、運動会と変わんねぇじゃねーか―
とうんざりしている。
…そして、体育祭が開催された。
『俺達はどれが勝てそうなんだ？』（広梳）
『え～と、サッカーと、バスケ辺りね。』（舞）
『確か、個人はそのどっちかにしかでられないんだよね。』（明）
『じゃあ、俺はサッカーだな。サッカーなら得意だし、広梳とも組めるしな。なっ。』（光治）
『おうっ。』（広梳）
『じゃ、私達が戦力をそそぐのは、サッカーに決まりね。分散してたら勝てないだろうから。』（舞）
『僕は、…観戦してようかな。』（明）
『何言ってんの、あんたもでるっ！』（舞）
ドンッ。明は背中を肘うちされた。
『ぐえっ。』（明）

そして体育祭が始まった。まずはバトミントン２―３で負ける。
テニス、健闘するが、負ける。バスケ、１０対４６という大差でやはり、負ける。それ以降も負け続けた。
そして、最後の競技が始まる。
『あんたたちー、これで勝てなきゃいいとこないわよー。』（舞）
遠くから応援する舞は痛い所を的確についてくる。
選手達は光治によって、指揮をあげられる。
『勝つぞー！』（光治）
『お～。』（選手達）
『なってねー、もう一回。』（光治）
『おーー！！』（選手達）

『はぁ～。』
舞は呆れていた。
『何したの？』
舞は手に持っていた選手起用表を明に見せる。
１５ジョーカー俺
１６天才広梳
２３エロ代官わたる
５１ハゲ丸本
１９ゲロ光秀
４デス秋山
４４デス秋山２（秋山兄弟の弟）
３４ポーカーフェイス秋場
９９ポーン荒木
７６マッドピカソ阿部
２８オタッキー明

明はしばらく、出る声もない。そして、ようやく、
『…、これ、もしかして……。』（明）
『そ、あいつ（光治）が書いたの。』（舞）
舞はバツの悪そうに額に手を当てている。
ピー。選手集合の合図がなる。
『頑張ってね。』（舞）
『…うん。そっちもね。』（明）
舞は力なさそうに応える。
『ええ、……頑張るわ。』（舞）

外野席は大もりあがりである。
『光治、負けんなよー。』
『キャー、　優様～。』

『かっこいい～。』
『墨ちゃ～ん。』
『マッドピカソ～。』
『ポーン～。』
光治は（味方以外）その中で聞き覚えのある単語が二つあった。
―優様？墨ちゃん？―
『あっ、何で芦来河兄妹がいるんだよ。』（光治）
芦来河がやってきた。
『なんだ、光治君、知らないのかい？今〔こん〕〔サッカー〕大会は男女混合なんだよ。』（芦来河）
『何～、そうだったのか…。』（光治）
『まあ、不利な女子を入れるチームは少ないけどね。』（芦来河）
墨もやって来た。
『光治君、お久しぶりです。』（墨）
『あ、ども。』（光治）
『恋とこれ、は別物ですから、正々堂々やりましょう。』（墨）
『ははっ、ああ、もちろん。』（光治）
審判が言い、ホイッスルが鳴る。一回戦、始めっ。ピーー。
最初にボールをとったのは、光治チーム。芦来河いわく、
『これぐらい、ハンデつけなくちゃね。』
だ、そうだ。
光治が走る、走る、走る。広梳は計算する。
明はボールを追いかける。マッドピカソはオウンゴールを決める。
ポーンはキーパーから勝手に攻撃へと転じる。
秋葉はポーカーフェイスでファールをとるっ。
こっちの味方はこんな感じで、相手はというと、
芦来河と墨がタッグを組み、様々な強力なプレイをしていた。
墨が蹴る、そこに芦来河がきて、また、蹴る、そこに墨がきて、また、蹴る、そこに芦来河がきて、シュートする。これは芦来河は味方の陣地中でやっている。相手の撹乱の為だ。そして、半分

ぐらいのとこまできたら、シュートする。遠いから、外れる、ということもなければ、高速のボールの威力も、おちているようには見えない。ポーンでなかったら、全て入っていただろう。
彼らは二人で、プレイしている、と言ってもよかった。
そして、４対３で、なんとか勝った。
『しゃあああああ、次も勝つぜ。』（光治）
へとへとになった明がくる。
『僕はボールを追いかけまわしただけだったよ。いる意味あんのかな？』（明）
『あるさ、お前は俺達の仲間だ。』（光治）
明は半信半疑である。
広梳もくる。
『お疲れだったな、ナイス計算！次も頼むぜ。』（光治）
『ああ、まかせろ。』（広梳）
そして、選手集合のふえが鳴る。審判が勝者を宣言する。そして、
『礼っ！』
『あざーした。』
『ふふふ、光治君、今度君と相まみえるときは負けないよ。』（芦来河）
『ああ、楽しみにしてるぜっ！』（光治）
墨が寄ってきて、ヒソヒソ声で何か話す。
『今度の、学園祭、一緒にまわりません？』（墨）
『ああ、二日目だな、いいよ。』（光治）
『やった、嬉しい。』（墨）
『俺もだよ。』（光治）
墨は人前でこういうことは隠さないが、兄がいるからだろう。一方兄はこういうことには敏感だ。
『何を話しているんだ？墨！！』（芦来河）
気にしている感が漂っている。
そして、各自、自分の陣地に戻り、第一試合が終わった。

『あんた達、あの、芦来河兄妹相手によくやったわね！』（舞）
『まあな、みんなのおかげだよ。』（光治）
『えっ、光治君にしちゃ、珍しい。』（明）
『何がだよ。』（光治）
『いつものお前なら、俺一人のおかげ、とか言うだろ？』（広梳）
『そーだっけ？』（光治）

そして、二回戦、
『えっ、棄権！？、どーして？』（舞）
舞は伝達係と話している。
『どーしたんだ？』（光治）
光治のクラスもガヤガヤとなる。
『なんか、クラスで頼んだ弁当が、…あたったみたい。』（舞）
『ってことは不戦勝ってことかい？』（ポーン）
『そういうことだよ、ポーン君。』（広梳）
いつのまにかみんな光治がつけたあだ名を使っている。かわいそうなのはゲロ光秀である。一度、やってしまってから、そういわれるようになってしまった。（光治に）
『チェッ、つまんないなあ。』（マッドピカソ）
『大丈夫だよ、阿部君、最後には拓也君と光明君達のチームにあたるはずだから、存分に活躍できると思うよ。』（明）
『ところであと何回勝てば、決勝なのさ。』（ポーカーフェイス）
『そういうこと、普通一回勝ったぐらいで聞く？まあ、いいわ。調べたげる。え……と、二回ね。』（舞）
そして、三回戦、
余裕で勝利。
四回戦、序盤はやや押されぎみだったが、後半、光治の一言をきっかけに挽回、勝利する。
そして、決勝、
『じゃあ、みんな決勝を前に気合いの一言を。まず、俺からか。

みんな、よくやった。まあ、奴と当たるまでは負けられないと思っていたが、まさか、ここまでできるとは思わなかった。ここまできたら、優勝しよう！！『（光治）

『フッ、楽勝さ。』（広梳）

『しばらく、エロ本我慢するっ。このぐらいの決意で頑張るよ』（エロ代官）

『ヅラは買わん、俺のポリシーだ。この、ポリシーを、奴らにぶち当てるっ！！』（ハゲ丸本）

『出るか出ないかのこのあつき衝動をコントロールし、最期に奴らにぶちまけるっ！。』（ゲロ光秀）

『殺すっ！』（デス秋山）

『殺すっ！！』（デス秋山２）

『無表情、それこそが、最強の武器。奴らなんて、チョロイさ。』（ポーカーフェイス）

『大将が勝つと言ってるんだ、絶対勝つに決まってるよ。』（ポーン荒木）

江戸時代劇のようなことをしているのはマッドピカソである。

『あ、勝たなきゃいけねぇ時がある。おいらは全力尽くすまで。』（マッドピカソ阿部）

『勝つよ、僕は戦う！！』（明）

光治は念のため、と、念をさす。

『よし、みんないい意気込みだ。…だが、デス兄弟、相手は殺すなよ。』（光治）

そして光治達は最後の決戦にそなえる。

そして、とうとうその時がやってくる。選手達はすでに互いに向き合って、並んでいる。

外野席は初戦とは比べものにならないくらいの人だかりだ。

ジャッジマンがマイクを持って高らかに宣言する。
『これより、最終試合、～対～の試合を始める。』
ワーワー。ピーピー（口笛）。外野席はうるさいぐらいだ。
『礼っ』
『よろしくお願いします。』
光治は拓也に言う。
『今日こそお前に勝つっ。』（光治）
拓也は光治に言う。
『無理だな。万が一にでも（アホに）勝ち目はない。俺達のクラスのチームワークは完璧だからな。』（拓也）
『じゃあ、その１００００分の１以下の確率で勝てたら、そうだな、女子の前で、坊主になって、た～君だよ、えへへ～、とでも言ってもらおうか。』（光治）
拓也は一言だけ言って、
『アホか。』（拓也）
去って行った。
光治は光明の所に行く。
『頼むから、花月には変わるなよ。』（光治）
光明は微苦笑で、
『うん、努力するよ』（光明）
と言った。
が、光治は内心、
―あいつ堪え性ないからなぁ、劣勢になると…。―
と思い、なるべくそのことを考えないようにした
そして、試合が始まる。

最初はイケそうに思えた。ボール運びがうまくいっていたからだ。
そして、二点も先制できた。…が、その後から全て変わった。拓也がキーパーになり、花月がでてきた。それだけでお手上げだった。
なぜなら、拓也はセンスを持って、ボールを必ずとる。花月は広梳

の計算で動く光治に、少しは苦戦するが、やはり、スルーし、ゴールを確実に決める。そして、
ピーー。ホイッスルが鳴り、結局2対15で負けた。

審判が整列をかける。
そして、
『礼っ！』
『あざーした。』
『ハンデニ点じゃ足りなかったか？』（拓也）
奴が残して行ったその一言にむかついた。
光明の所に行くと、
まず、花月が、
『俺様がでるまでもなかったな。』（花月）
―じゃあ、でるなよ―
と思い、次に光明が
『ごめん、光治君、止められなかったよ。』（光明）
と、すまなそうにいうので、抗議はできなかった。

そして、光治のチームは2位ということになった。一応表彰されたので、大健闘した、と言える。
そして、開幕。

『くっそー、勝ちたかったぜ。』（光治）
『まあ、仕方ないよ。チームでは勝ててもあの二人が相手じゃね。それに先制できたといっても一筋縄じゃいかなかった。』（明）
『そうだな、それに焼肉も逃したしな。』（広梳）
広梳は明るく言う。
舞はそこに入ってきて、怒りだす。
『それなのよ、光治、あんたがみんなの指揮をあげる為に言った、”一位になったら、舞がクラス全員に焼肉おごってくれるぞー”っ

て言った嘘、実現しなくちゃならなくなったのよ。』（舞）
『なんで、2位じゃん。』（光治）
『あんたのせいよ。ここまで頑張ってこれたのは、あれのおかげだって（みんな）言うんだから。』（舞）
舞はかんかんである。
『ま、光治君が全額払ってくれるって。』（明）
『え？』（光治）
『そうだな、言った本人がどうにかしないとな。』（広梳）
『え！？』（光治）
『まあ、そういうことなら…。』（舞）
舞の怒りもおさまってくる。
『何故だ～～～。』（光治）

体育祭編・完

番外～体育祭編（後書き）

今日は出血大サービスでいつもより多めに書きたいと思います。
ちなみに学際編を書くみたいに思わせる記述がありましたが、実際には書きません。
次の話で考えているネタがなくなるので以降はゆっくり目のペースになるかと思いますが、末永く？お付き合いください。
次回は光明が仲間になった、少し後の話です。ライバルとの初めての出会いとは！？
そしてそしてなんとたぷ友好会が…。光明君の活躍をご期待下さい。

光明の活躍その1

学校の廊下でのこと、
『あ～、今日も暑いな、明。』（光治）
『そうだね、光治君。僕もあんまり暑いんでロン毛切っちゃったよ。』（明）
『おおっ、いつの間に。よく切ったなぁ～。お前のシンボルとでもいうべきものを。』（光治）
『まあ、冬には冬、夏には夏のスタイルがあるもんだよ。人間、臨機応変に生きなきゃね。』（明）
『……まさかオタクに物をおそわる事になるとは。』（光治）
『あっ、それ差別だよ、光治君。』（明）
そしてそうこうしているうち、
バッタリと廊下の角で誰かに出会った
『フ、フ、フ、ここであったが千年目、覚悟しろっ。』（光治）
『誰？お前。』（拓也）
ずてっ。（光治こけた）
『ひ、人の顔を忘れるとは……。テメェ、それでも人間か！』（光治）
『いや、以前、光治君も僕に対して似たようなことあったから。』（明）（ツッコミ）
『ああ、確か光治だっけ。和田光治。お前、有名だからな。千年目っつーか、昨日会ってんじゃねーか、バカッ。』（拓也）
『んだとコラッ。』（光治）
『んじゃ、俺バカにかまってる暇ねーから。』（拓也）
そういって拓也はどこかに行った。
『あの人は…神之麹（かみのこうじ）　拓也（たくや）君だね。昔からの友達とかなの？』（明）
『初めて会ったのは昨日だ。』（光治）
『き、昨日！？』（明）

『あれは今思い出してもムカつく。』（光治）

回想

日曜日、光治はそこら辺を散歩していた。

そこに突然、悲鳴が聞こえる。

『キャー、火事よー。』

光治は一人でどうしたらいいかわからず、ちょうど、近くにいた通行人に声をかける。

その通行人は学校で見覚えのある顔だった。

その通行人（拓也）は放火犯を追おうとしていた。

『目の前で火事が起きたんだぞ。放火犯追うより、中の人助けるのが、先だろ！』（光治）

光治は拓也にいきなり顔を殴られた。光治はよろける。

『助けるのが先？馬鹿か、お前は。何様のつもりだ？助けに行って、でられなくなったらどうする？そして助けられる側になったら？もう、消防署へは通報した。俺達にできるのはあの放火犯を追うことだけだっ。その方が、楽で確実に社会に貢献できる。』（拓也）

光明の活躍その2

『幸い武器は持ってないようだからな。捕らえるのは簡単だ。』（拓也）

光治は拓也を殴り返した。この時、拓也は油断してたのだろう。防御もカウンターもできなかった。

光治は真剣な顔でこういう。

『助けるのが先だ。まだ火も余りまわってない。』

『馬鹿がっ。火をあまくみるな。熱や煙、さらに場所も封じられてはお前なんかすぐくたばるに決まっている！！！』

『こうして言い合っている内に、放火犯に逃げられ、中の人も助ける事ができなかった、つーわけだ。』（光治）

『それは…。』（明）

明は

―どっちも馬鹿なんじゃないかな―

と言おうと思ったが、止めた。

『なんだよ。』（光治）

『まあ、結果的にはそれでよかったと思うよ、僕は。』（明）

『は？何で？何もできなかったんだぞ？あの野郎のせいで。』（光治）

『だって、どっちも危険だもの。専門的なことは専門家に任せるのが1番だよ。火事には消防士、放火魔には警察官、というようにね。確かに、光治君が火事の中の人を助けられたら、それはそれでいいと思うよ。拓也君が放火魔を捕まえられたら、それはそれでいいと思う。けど、結局、自分の事しか考えてないよね。』（明）

『どーゆーことだ？』（光治）

『心配する人のことを考えてない。もし、君や拓也君が怪我、もしくは死んだ、なんてことになったら、どれだけ他の人が心配したり、

悲しんだりするか、考えたことはあるかい？君の体は君一人のものじゃないんだ。火事の中の人を助けたければ、消防士になればいいし、放火魔を捕まえたければ、警察官になればいい、こういうことさ。』（明）
光治は押し黙った。
が、少しして、
『だけど、広梳の時は協力してくれたじゃねーか。』（光治）
『あれは…君の熱意に負けて……。』（明）
この時、光治は後悔した。相手が押し黙るジョーカーのようなものを使った気がして。
明は下を向いていたが、やがて光治の方を見て、
『広梳は君の大切な人だったんだろ？』（明）
『ああ。』（光治）
『協力しない方がよかった？』（明）
『いや、そんなことはない。感謝している。』（光治）
『なら、それでいいじゃないか。』（明）
光治の方を向いてからの明の言葉はただ、淡々と発せられていた。
感情もなく、機械のように。

そして、部会、
いつもの部屋に行くと、舞と、広梳が喧嘩していた。

光明の活躍その3

『だから、手伝ってって。じゃないと、あんたのあらゆる悪評をばらまくわよ。』（舞）
『だから、嫌だって言っただろう。だいたい、いつまでもそのネタで俺を操れると思うなよ。』（広梳）
どちらも息が荒い。
光明はただ、おどおどしている。
『おい、おい、どうしたんだよ。』（光治）
二人とも凄い形相で光治を睨む。
『コイツが！！！（広梳）
広梳　が！！！』（舞）
それ以降は言葉にならない。…というより双方とも言葉にならない言葉を発する。
明は、言う。
『ちょうどよかった、二人とも顔を見たくないんだよね、僕も光治君と顔を合わせたくないんだ。こんな合わない同士が部活をやってもしょうがない。たぶ友好会、解散…しようか。』（明）
『ハッ、それはいいな、せいせいするよ。』（広梳）
『こっちのセリフよ。』（舞）
二人は部屋を出て行った。
『ちょっ、待てよ、お前ら…』（光治）
『バイバイ、光治君。』（明）
明も部屋を出て行く。
『くっ、何だよ、みんな！じゃあ、俺もやめるよ！』（光治）
そうして、残ったのは光明一人。
膝がガクガク震えている。目から涙がこぼれる。
『なんで、昨日まで、あんなに、楽しく…。』（光明）
頭の中で声がする。

―どーするんだ？ご主人様よぉ？―（花月）
『どーするったって…。』（光明）
―主人も、やめたいですか？―（刹那）
『僕は、やめたくないっ！！』（光明）
―じゃあ、どうするのです？―（刹那）
―へっ、決まってらぁ―（花月）
『みんなを、連れ戻す。』
―それでこそ、俺様が見込んだ男よぉ。お前の人望がどれほどのものか、見物（みもの）だな。―（花月）
『まず、理由を聞かなくちゃ。』（光明）
光明は走る。出て行ったみんなの元へと。
光明が部室を出た後、部室の窓にはポツンと明が一人で寂しそうに帰宅する様子が写っていた。部室には、いつの間に撮ったのか、部員になった記念として、その日の日付とその当時の写真が飾ってある。その中の一枚（光治と明が肩を組んで笑ってブイサインしている写真）を囲っているガラスケースにいきなりひびが入る。まるで、部の崩壊を表すように。
残った部室にはいつまでも蝉の鳴き声が響いていた。

光明は学校を出て、ようやく一人に追い付いた。
『光治君！！』（光明）
光治は振り返る。

光明の活躍その４

『ん？何だ？』（光治）
光治の目には光がない。
光明は息を整えてから、こう言う。
『考え直してよ。たぷ友好会に戻ろう？』（光明）
『ごめんだな。俺は明が誘ったから入ったんだ。あいつが抜けた今、俺があの部にいる意味はない。』（光治）
光治は振り向き直す。そして、又、歩を進める。
最後に光治はぽつり、
『…それに、あのメンバーじゃないとやる気が起きねぇしな。』（光治）
と言った。
『…光治君。』（光明）

次の日の学校の休み時間、光治達のクラスへと向かう。
広梳はいなかった。
光明は明に話しかける。
『裁薔君、たぷ友好会に戻ろう？』（光明）
明は教科書、ノートをかたずけながら、釈然としてこう言う。
『ああ、たぷ友好会だけど、今から廃部届けをだしに行こうかと思ってたんだけど、一緒に行くかい？』（明）
机にニ、三粒涙が零れた。光明は明が机に出したその紙を破いた。
『僕は…続ける。』（光明）
明は溜息をつくと、
『じゃあ、責任者交代の紙を書くから、印鑑持ってきてね。』（明）
と言った。

次の日、休み時間に舞に会いに行く。

『え？たぷ友好会？』（舞）
舞は忙しそうにケータイでメールを打っている。
『うん、戻って来てよ』（光明）
光明は昨日の件が堪えたのか、声に力がない。
『そんな部活あったっけぇ。』（舞）
光明は頼む。
『舞さん、戻ってきて。』（光明）
『そんな未練は残さない方がいいわよ。廃部になるのは事実、事実は事実で受け止めなきゃ。』（舞）
依然、舞はこっちを見ない。
光明は教室をとぼとぼと出て行った。

次の日、学校の休み時間に光明は広梳に会いに行った。…が、休み。どうやら、あれ以来学校に来てないらしい。光明は休み時間で広梳の住所を調べ、場所を特定していた。
…そして、学校の帰り。
『ここら辺だったはずだけど。』（光明）
光明は前方に城戸、と書かれた表札の家を見つけた。そして、チャイムを鳴らす。
…しかし、反応がない。
光明は普通より少し大きな声で、しかし、今出せる精一杯の声で、
『あの～、城戸広梳君のお宅ですかぁ～？』
と言った。すると、2階からドタドタ走ってくる音が聞こえ、やがて、誰かが、玄関前まで来た。そして、カギが開かれ、ガラッと、戸が開いた。と、同時に、
『先日、電気代は支払ったはずですが！』（広梳）

光明の活躍その5

と、光明の声の倍はあろうという大きな声がした。
広梳が戸を開いた先にいたのは、元気のない光明だった。
『光明！？、どうしてここに？』（広梳）
光明はぽろぽろと涙が流れてくる。そして、広梳に泣きつき、
『戻ってきてよ、戻ってきてよ。戻って…』
と、５分くらいずっと言っていた。
広梳はどうすればいいのかわからない。困った顔をして、やがて光明が泣き止むと、
『まあ、ここじゃあ、なんだ、うちに入れよ。』（広梳）
と言った。
そして、光明はみんなが戻ってきてくれないことを話した。
『そうか…。そうだな、確かに俺もあん時はカッ、となってたかも知れない。舞に謝ってみるよ。』（広梳）
『本当に？』（光明）
光明は最近みせたことのない、嬉しそうな顔をする。
『ああ。もともとお前を苦しませる為に喧嘩したわけじゃないんだ。許してくれ。』（広梳）
広梳は誰にもしたことのない仕草―土下座―をする。
『いいよ、そこまでしなくても！』（光明）
光明は驚く。
『それに、後悔もしていたんだ。たぷ友好会廃部のきっかけを作ってしまった事へのな。お前は俺と舞が仲直りするきっかけをくれた。そしてたぷ友好会復活の。感謝の意も含めて、こうさせてくれ。』（広梳）
この時、光明は素直に喜んだ。
『うん。』（光明）

…そして、
『明日から学校来るよね！！』（光明）
『ああ、もちろんだ。そして、たぷ友好会復活の手伝いをさせてくれ。』（広梳）
『うん、一緒に頑張ろう。』（光明）
…そして、その日は光明は家に帰った。

そして、次の日の休み時間、光明が光治達のクラスに行くと、ちょうど、広梳が舞に謝っていた。
『すまん！舞！！』（広梳）
舞は広梳と目線を外しながら、
『私も…ごめん。』（舞）
と言った。
そのとたんに、嬉しさのあまり光明は椅子に座っている舞に抱きついた。
『舞さん！』（光明）
舞は頬を赤くして、
『ちょっ、光明君、みんな見てるってば…。』（舞）
『ははは。』（広梳）
光明はそれに気付いて手を離した。

光治と明もそれを見ていた。
次に光明と広梳は光治の席へと向かい、
『光治君、二人は仲直りしたよ。後は君と裁薔君だけ…。』（光明）
光治は光明の目を真っすぐ見てたが、やがて、下を向いた。そして、
『僕は戻る気ないよ！！』（明）
という声が聞こえると、少しビクッ、として、
『ごめんな。』（光治）

光明の活躍その6

とだけ言った。
広梳が、
『光治！！』（広梳）
と言うと、
元気のない声で、
『…うるせぇ。』（光治）
と言い、そっぽを向いた。舞は、
―明君が戻らないと光治は無理かな。―
と思い、明に聞いてみる。
『明君、』（舞）
すると、明はいきなり席を立ち、どこかに行ってしまった。明が閉めた教室のドアの音の大きさは光明に絶望を感じさせた。

休日、光明は家の近くにある石の階段の上で座りながら悩んでいた。っと、そこに誰かが階段を走ってのぼってくる音が聞こえる。
だが、光明は体育座りで下を見ている。
空は雲ひとつない青空だった。光明はこの空さえ気付かない。
『よっ！』
光明は顔を上げた。
『拓也君？』（光明）
『確かクラスメイトの…光明、だったか？』（拓也）
拓也はランニングをしていたようで、顔から汗がしたたり落ちている。よくみると、シャツもビシャビシャだ。
『どーしたの？』（光明）
拓也は１５０メートルはあろうかという階段をのぼりきったというのに、息をほとんど乱してない。
『お前こそ、どうしたんだよ。』（拓也）

光明は事情を説明した。
『ほお？あのアホと明が喧嘩した？』（拓也）
『うん。』（光明）
『成る程、お前は二人に戻ってきて欲しいわけだ。』（拓也）
『うん。』（光明）
『わかった、俺もあのアホの元気のない顔を見てみたい。ちょっと、ちょっかい出してみるよ。』（拓也）
『え？、それって…。』（光明）
『勘違いするなよ、ただ、ちょっかい出すだけだ。　』（拓也）
そう言うと、拓也は又、走って行った。

そして、学校の日、休み時間に拓也は光治に会いに行こうとした。
…が、途中、廊下でばったり出会った。
『よう。』（拓也）
拓也があいさつしたにもかかわらず、光治は
『今はお前と話す気はない。』
と言って、過ぎ去ろうとした。
拓也は光治の肩を掴む。
『待てよ。』（拓也）
光治は拓也を睨む。
『なんだ？』（光治）
『お前、喧嘩して、あの部、抜けたんだってな。』（拓也）
拓也は含みのある笑いをしている。
『なんだ？笑いに来たのか？』（光治）
『そうだ。』（拓也）
光治は拓也の手を振り払う。
『ほっとけよ。』（光治）
そうしてまた、去ろうとする。
去り行く光治に、拓也は
『何で、そうなった？』

と、聞く。

光明の活躍その６（後書き）

今日もちょっとサービスしちゃいます。
と、いうより、あと少しなので。

光明の活躍その7

光治は一瞬振り向いて、
『お前のせいだよ。』（光治）
と言った。
―俺のせい！？―（拓也）

次に拓也は明の元へと行く。そして、
『喧嘩の原因は…俺なのか？』（拓也）
と、真剣な顔つきで聞く。明ははっきりと、
『違う。』
と言った。

次の日の休日、
光治は墨と遊ぶ約束をしていた。そして、光治の家に墨が来た。
光治は話す。
『墨、俺、たぶ友好会、抜けた。』（光治）
墨はひどく驚いていた。
『えっ？何でですか。』（墨）
『明と…喧嘩して。』（光治）
光治の顔が暗くなって行くのが墨にもわかった。
『どんな風に喧嘩したんです？』（墨）
光治は墨に話した。
『それは光治君が悪いと思いますよ、私は。』（墨）
『え？悪いのは、拓也だろ？』（光治）
墨は溜息をつく。
『どうして、自分を正当化するかなぁ。よく考えてみてください。
明君の態度が変わる前に光治君は何て言いました？』（墨）
『え？あ、あれか！』（光治）

『そう、あれが明君を傷つけたんです。謝って来て下さいね？』（墨）
『はい。』（光治）
光治はしょんぼりしてたが、その実、答がわかったことで嬉しかった。

光治が墨と会ったその日、明はケントに呼び出され、喫茶店に入って行った。
店の中に入ると、ケントがすでにいた。
『よ！』（ケント）
『…ケントさん』（明）
『たぷ友好会解散するって？』（ケント）
明は驚く。
『何故それを！』（明）
『そーゆーことは自然と耳に入ってくるものさ。』（ケント）
『実際には責任者の交代して僕があの部を抜けただけですけどね。他の人は知りません。』（明）
『そうか、嫌になったから他の奴に責任押し付けたってか。』（ケント）
『そういうわけじゃ…。』（明）
『何が嫌だったんだ？』（ケント）
『光治君は、自分のことしか考えてない。危なくて、みていられない。正義感が強すぎる。』（明）
そして、明は抜けた日から今までのことを全て話した。
『お前は、一人の少年の幸せを壊そうとしていることに気づいているのか？』（ケント）
『え？光治君のことですか？』（明）
『違う、光明って奴のことだ。それほどまでに努力していたってことはみんなといて幸せだった、楽しかったってことじゃないか？それを壊すということは光治がしていること以上に最悪なことじゃな

いのか？』（ケント）
明はショックを受けた。

光明の活躍その8

―僕も自分のことしか考えてなかった！？―（明）
『それに、光治は悪い奴じゃないって知ってるだろう？』（ケント）
『はい。』（明）
『ただ、光治は暴走する凶器のような奴だ。誰かが止めてやらなくてはいけない。』（ケント）
『僕には、無理です。』（明）
明は自身でも気付かぬうちに涙を流していた。
『お前じゃなくてもいい。だが、できる限り支えてやれ。そこまで無理をする必要は、ないから。』（ケント）
ケントはやさしく、そう言った。

その日の夜、光治から明に電話がかかった。
『明。』（光治）
『何？』（明）
『ごめん。』（光治）
『本当に！？理解して言ってる？』（明）
『ああ、俺の目を見ろっ、これが嘘をついている目に見えるか？』（光治）
『…どーやって見るのさ。』（明）
『心眼で。』（光治）
『ふっ、フフフ。分かったよ。ゴメン、僕も悪かった。』（明）

次の日、
拓也が明の元へと来た。光治も見ていたが、ひそひそ声で、よく分からない。
『明。』（拓也）

『何？』（明）
『俺が悪かったのなら、ひとつ、言うことを聞く、それで許してくれないか。』（拓也）
明は
―この人も不器用だなあ。―
と思いつつも、フフッと笑った。
『じゃあ、たぷ友好会に入って光治君のストッパーになる、これなら許してあげる。』（明）
拓也は怪訝そうな顔をしてたが、やがて了承した。

『ハイッ、チーズ。』（舞）
舞が撮る側から写る側へと走る。
…そして、カシャ。
たぷ友好会の皆が皆、笑っていた。
真ん中には光治と明が肩を組んで、ブイサインをしていた。拓也は後ろで、その二人を支えていた。
そして、その隣で嬉しそうに特大の笑顔で笑っている光明。
たぷ友好会の新たな一枚。題名の欄には
『新たな部員、拓也！！と、たぷ友好会復活記念！！！』
と書かれていた。

光明の活躍・完

Mischief Of Destiny～青年（1）

『僕には声が聞こえる。』（時乃）
―ハッ、何だ？神のお告げか？―
『もしくは、聞こえない。』（時乃）
―何を言ってやがる。どっちかに決まってんだろ。―
『君には、わからないのか？聞こえるという事は事実なんだ。』（時乃）
―ハ？―
～は耳をほじくっている。
『なのに聞こえないということは幻聴ということ、なのに聞こえるということは…』
時乃は顔を暗くした。
『現実だということだよ。』
―何を言ってやがる。―
『僕には声が聞こえるんだ。』
―何言ってんだか、さっぱしだ。―
『だろうね。君にはわからないだろう。かかった事がないのだから。』
―何にだ？―
『この病気に。もしくはこの状況に。』
―ふ～ん。―
『僕は、世界を呪う。世界は僕を呪っている。』
―だいそれた奴だ。―
『だいそれてなんかいない。世界が僕を呪っているのは事実。僕が、世界を呪うことしかできないのも事実。』
―お前が、世界に呪われてんのはわかった。だが、呪い返して何になる？まず、動くことが大切だろう？―
『”恐怖”って知ってるかい？』

―恐怖？俺様を初めて見た時、たいてい人は畏怖するな。―
『そんなもんは本当の恐怖じゃない。』
―ああ！？―
『僕は君を見たって怖くなんかない。本当の恐怖を知ってるから。』
―俺様より怖い恐怖？なんだ、それは？言ってみろ。―
『孤独。』

僕が花月と出会ったのは一ヶ月前だ。奴は突然僕の頭の中に舞い降りた。舞い降りたと言うと、神々しいが、奴はそんなもんじゃない。真逆の存在だ。そして、時たま、僕の体を借りて行動している。
最初は幻聴、もしくは今ある状況のせいだと思った。が、頭の中で、
―おい、おい、ご主人様よぉ、ずっと家にいてつまらなくねぇのか？―
と聞こえて、
―うるさいっ！消えろ、幻聴！！―
と念じた後、念じたことに対する応えがかえって来た。
―幻聴？なるほど、今回のご主人様は病気持ちか。―と。
僕は驚いた。

Ｍｉｓｃｈｉｅｆ　Ｏｆ　Ｄｅｓｔｉｎｙ～青年（１）（後書き）

今回は知ってる人は知っている、青年と花月の話です。どう転んでいくのかは作者にもわかりませんがよろしくお願いします。

…一応番外かな。

Mischief Of Destiny～青年（2）

―俺様は幻聴なんかじゃねぇ。なんなら今からお前の脳裏に俺様を視覚化してやる―
すると、人間の形が頭に浮かんで来た。
時乃は驚いて、しかし冷静に考える。
…なんと形容したらいいかわからない。ちょい悪（あく）でキザっぽい。これが1番合ってると思う。
そして、念じる。
―お前は幻聴じゃないのか？―
―ああ。―
時乃の顔が、少し明るくなる。
―じゃあ、今までのもお前が？―
―いや。―
その瞬間、どん底に落とされたような暗い顔になった。
そして、
―やっぱりか…。今更そうだとしても僕は疑うけどね。―
花月の時乃（ときの）に対する第一印象は変な奴、だった。

月曜日だというのに、9時になっても時乃は起きない。花月はいらついていた。
―ご主人様よぉ、今日も学校にいかねぇのか？―
時乃は眠たそうにしてたが、やがて上半身だけむっくり起きあがると、
『僕は学校へは行かない。』
とだけ言って、死んだように又ばったりと倒れた。
それから花月がいくら呼び掛けても応答しなかった。やがて、母親が来る。さっき時乃は自室の扉に鍵をかけたので、母親は開こうとしたが開かない。仕方なくそこの前で言う。

『大(だい)、今日も休むの？』
返事はなかった。
母親は悲しそうな声で
『そう。』
と言うと、階段を降りて行った。
―お前は母親を悲しませるのか？―（花月）
青年は反応したどころか、即答した。
『ちがうっ！！母さんは俺を苦しめたいんだ。』
花月は不思議に思う。
―どういうことだ？―
時乃は顔を少し上げると、
『夜になったら話す。』
と言った。
花月は呆れた。
―やれやれ、夜まで寝るつもりか―
呆れて溜息をついた。
花月はこいつ（時乃）が学校嫌いなわけを調べようと、寝ている間、体をのっとることに決めた。
声が聞こえるから休むってのはどうにもおかしい。
花月は時乃の体をのっとって、まず、ベッドの下にあった鞄をさぐる。すると、生徒手帳と書かれた手帳が見つかった。
『何々、○○高等学校、三年Ａ組、普通科○○コースか。』（花月）
花月は驚いた。
―三年！？なおさらだ。何故行かねぇ。―
『生徒手帳に学校の地図があるな。学校に行ってみっか。』（花月）
花月は前の主人が学校に行く時、制服なるものを来て行っていたのを覚えていた。
―窮屈だな。―
そう思いながら着替えた。
…そして、家に母親はいなかった。

Mischief Of Destiny～青年（3）

仕事に行ったのかもな、へっ好都合だ、そう思いながら外に出る。
地図を見ながら学校に向かおうとする…が遠い。外に出ると、そこはゆるやかな道路の斜面だった。右を向くと、上り、左を向くと、下りの。
学校は東、つまり下りの方にある。
道路に沿って行くと、やがて、線路が見えた。
生徒手帳に書かれている（時乃が書いたであろう）『学校へのみちのり』には、電車で15分、と書かれていた。花月は
―（電車に乗るのが）面倒だな。―
と思い、線路沿いを走って行った。
やがて、とある駅に着く。学校はその駅のすぐそばにあった。
入口に入ると、教員が廊下を歩いていて、自然と目が会った。
教員はビクッ、としていたが、（顔は時乃と同じだが、花月がのりうつると邪な感じになる為）
やがて、
『大、大なのか？』
と言い、顔が綻(ほころ)びた。
花月は
―奴（時乃）の知ってる教員か―
と思い、乱暴に、
『ああ、そうだ。』
と言う。自分より下等な者に花月は敬語は使わない。
『よく、…よく学校に来てくれた。病気は、治ったのか？』
『まだだ。ただ、来たくなったから来ただけだ。』
花月は本音を言ったのだが、教員は別の意味でとらえる。
『そうか、行きたくなったか。良くなってきた証拠だな。』
教員の顔を見ると、本当に嬉しそうだ。

『病気の辛さから、少しグレてしまったようだが（言葉使いなどが）、大には変わりない、教室にお入り。』
花月は
―いろいろ聞きてぇんだが…。訝(いぶか)しまれるだろうな。―
と思い、機転をきかせた。
『実は、記憶喪失なんだよ。』
『何！！……どうりで以前と違う…。わかった、教室に案内しよう。』
そして、教室前まで案内してもらい、中に入る。
…授業中だったが。
中の教員も始め、花月を見て退いたが、やがて驚いた。
『大！』
花月を連れて来た教員はその教員に事情を説明した。
『まさか…そんな事が。』
やがて、花月を連れて来た教員は教室を出て行った。そして、残った教員が、
『私は村野(むらの)だ。君の担任だった。』
担任は悲しそうな顔で言う。
そして、（恐らく）時乃のクラスメイトであろう者達に向かって、村野は悲しそうに語り始めた。
『大が来てくれた、これは大変喜ばしいことだが、みんなには悲しいお知らせをしなくちゃいけない。大は…記憶を無くしたらしい。』
（村野）
教室が、静まり返った。

Mischief Of Destiny～青年（4）

『みんな、自己紹介をしよう。』（村野）

そして、クラスの自己紹介が始まった。普通に言うものもいれば、

『おい、大、俺を忘れたのか、健太だよ!!』

とか、

『大君、僕は忘れるはずないよね?』

花月が、

『知らん!』

と言うと、

顔をうつむけて、その後、花月の胸倉を掴み、涙ぐみながら

『昭吾、関口昭吾、もう絶対忘れるなよ。』

と言う奴もいた。

花月は

―なんだ、意外にも奴にも人望があるじゃねぇか。一体何が奴をそうさせる。―

と思う。

そして、自己紹介が終わると、村野は、

『これ以上は大も疲れる、だから今日はこれまで。あと君らは自習!』

と言うと、花月を連れて、教室をでて行き、別の部屋に連れていかれた。

そして、その部屋で村野と二人きりになる。

『大…。辛かったろう、苦しかったろう。すまない、先生のせいだ。』

『どういうことだ?』

『これは…思い出さない方がいいのかも知れない。』

花月が凄い剣幕で

『話せ！！』
と言うので、村野も、
『わかった。』
と了承した。
『実は、大、お前は…』
村野は言いにくそうにして、言葉をつまらせていたが、やがて、口を開いた。その真剣そのものの表情に、花月の顔も強張(こわば)む。
『幻の声が聞こえる、幻聴だった。』
知っている情報と与えられた情報から、花月はがっかりし、本音を漏らした。
『知ってる。』
村野は驚く。
『知ってる？』
花月はしどろもどろしながらも、
『あ、ああ、母親が言ったんだよ。』
と言った。声も裏返っていた。
『そうか。』
花月は重苦しそうな雰囲気の中、さらに聞く。
『それだけだったのか？』
教員は口を開く。
『それだけじゃない。』
花月はいらついた。
『なんだ、はっきり言え！』
『お前は幻聴と、そうでないものがあると言っていた。』
教員の目はすわっている。
『どういうことだ？』
村野は顔を背けると、
『これ以上は…知らない方がいい。』
と言い、さらに、
『大、もう帰れ、疲れただろう。』

と、半ば、強制的に帰された。
花月は帰宅する中、
―チッ、収穫なしかよ。夜話すと言ってたし、結局、本人に聞くのが1番か…―と思った。

そして、家に着き、二階に上がり、ベッドに入った。家は誰もいなかった。

Mischief Of Destiny～青年（5）

夜、と言っても深夜、時乃は起きた。そして花月に呼び掛ける。
―花月、起きてるかい？―
花月は機嫌悪そうに返事をする。
―ああ。―
『ここじゃあ、なんだから、近くの山に行こうか。』
―家が出てすぐ斜面なのは山だからか。―
花月は今気付いた。
そして、山頂。そこは意外にすぐ着いた。１０分くらいで。
青年は草の上にねっころがっている。
『ここは僕のお気に入りの場所なんだ。街がよく見える。今は街の電気もついてないけどね。春になると、この大きな桜の木がよく映える。夏になるとその木の上で寝れるのがいいね。読書もできるしさ。秋になると、まわりの木々が色んなきのみを落とすんだ。冬はね、寒いけど、雪がいいね。特にこのオレンジ色の光の街灯が照らすところだけ、幻想的な感じになるんだぁ～。』
時乃は無邪気な子供のように楽しそうに話す。
―おいおい、時乃ぉ、俺様はそんな話を聞きにここまで付き合ったわけじゃねーぞ。―
時乃は上半身を起こし、体育座りになると、
『わかってる。』
と言った。
そして、話す。

―孤独、だと？―
『ああ、そうさ。孤独。』

―わからねぇな、じゃあ、昭吾とか健太は一体なんなんだ？―
時乃はきょとんとする。
『何故お前がそれを知って…あっ！もしかして、又、勝手に僕の体を！！』
―ああ、使わせてもらった…が収穫なしだ。お前が学校に行かないわけって単に幻聴が聞こえるだけってことなのか？―
時乃は言う。はっきりと。しかし、暗く、重い声で。
『ちがう。』
そして、少し間をおいて、花月に尋ねる。
『先生とか（クラスの）みんなはなんかお前に言わなかったか？』
―特に何も。―
『言えなかったのかもしれないな。』
―だから、はっきり言え！俺様に隠し事をするな！―
青年は星を見る。
『綺麗だよねぇ。』
―また、妄想モードか。―
花月は思った。
『僕がこんなにも辛いのに、死なないわけ、わかる？』
時乃の目が輝いて見えた。
―知るか、死にてぇなら勝手にそうしろっ。俺様も他の奴のとこへといける。―
『それはね、自然が、地球が好きだからだよ。人間は…嫌いだ。地球の自然を…人工的なものに変えていく。そして、壊していく。』
―テメェも人間じゃねーのかよ―
花月は呆れつ聞く。
冷たい風が通り過ぎた。
『寒いね。そろそろ帰ろうか。』
―たくっ、どいつもこいつも。―

Ｍｉｓｃｈｉｅｆ　Ｏｆ　Ｄｅｓｔｉｎｙ～青年（５）（後書き）

花月はああ言っておりますが、私は楽しいことをあじわずに死ぬのは損だと考える方ですので。

Mischief Of Destiny～青年（6）

『幻聴のようなことを僕に言ってる人もいるってこと。』
時乃は最後にぽつりと花月が知りたがっていた答を述べた。
花月は思った。
―つまり、幻聴と現実の両方で、似たような悪口が聞こえるっつーことか？なーるほど。―
そして、その日時乃は家に帰って寝た。

時乃が寝ている間、花月は思い出にふけっていた。
―あれからもう１５０年かぁ。俺様を唯一認めさせた男、奴はあっちで元気にしてっかな。こいつ（時乃）は世話するにめんどくさい奴だが、奴の遺言があるからな。仕方ねぇか。たぶ友好会、あん時が１番楽しめたな。―
花月の脳裏に昔の記憶が浮かびあがる。

パソコンのようなものから定期的にピッ、ピッ、と音がなる。画面には、緑色の線が波うっている。ベッドには白髪のお爺さんが寝ていた。その隣には白衣の中年らしき男性が一人とこれまた白衣の女性が一人が立っている。
―花月、いるか、花月―
―なんだ？―
―最期のお願いだ―
―俺様は神でも悪魔でもねぇぞ―
―簡単なことだ。お前にもたぶ友好会の意志をついで欲しい、それすなわち―
―正義の意志を貫くこと…か―
―そうだ、リーダーは正義感の塊のような奴だった―
―ありゃあ、ただの馬鹿だ―

―フフッ、私も、もうお迎えが来たようだ。結局、彼らの中で私が1番長生きしてしまったな。―
―ちょっと待て、俺様はまだ約束してねぇ―
―じゃあな、花月―
いつの間にか、パソコンのようなものの画面の波線は直線に、音もピー、に変わっていた。
―俺様はまだ、約束してねぇからな！！―
花月の念話に対する返答はなかった。

花月は思う。
―約束はしてねぇが、奴の遺言だ。守らないわけにはいかねぇだろ。正義の意志…か、とどのつまり、困ってる奴を助けろってことなんだよな。時乃を助けるのはひと骨折れそうだが、いっちょう、やってみっか―

そして次の日、
いつもどうり、時乃は起きない。
花月は今日も学校に行こうとする。

学校の教室。
花月は椅子に座って腕を組み、足を机の上に出すという格好で
『さて、学校に来たのはいいが、どうやって奴を良くさせるか…』
悩んでいた。
そこに、健太と昭吾がやってくる。
『おっす。記憶を無くした少年。』
健太はまるで、何事もなかったかのように普通に接してきた。
昭吾が怒る。
『健太、それは酷いだろっ。』
『ごめん、ごめん、つい。』

Mischief Of Destiny～青年（7）

花月は思った。
―仲のいいこいつらを利用すれば、奴も学校に来るようになるんじゃねえか―
花月は名案だ、と思い、呼びかける。
『おい、お前ら！』
健太と昭吾は先生に怒られたかのようにビクッとする。そして同時に、
『何？』
『何だよ。』
と言った。
『明日、休みだよな。』
又しても同時に言う。
『そうだが？』
『だから、何だよ。』
花月は笑みを浮かべると、嬉しそうにこう言った。
『明日、俺様に付き合え。』
健太と昭吾は双方とも顔を見合わせた。
学校も終わり、帰宅途中。『明日の午前、９時、俺様ん家に来い』か。どういう了見だろうな？
昭吾は疑問に思う。
―確かに一年から二年の後半までは一緒に行動していたが、それ以降は全く学校に来なくなり、連絡もとらなくなったというのに、…しかも大から誘うなんて一体？―
健太の方は案外平然としている。
『友達やめましょうってことかもよ。』
昭吾は健太の方を向いて真剣な顔付きで言う。
『馬鹿なっ！！』

『まあ、俺達が気にしたって仕方ねぇって。』
昭吾はがっかりした様子で、
『そうだな。』
と言った。
そして、当日。
時乃家のチャイムが鳴る。玄関前には健太と昭吾がいて、健太は玄関前でインターホンに向かって喋っている。
『すみませーん、大、いますか～？』
パタパタと走ってくる音が聞こえる。昔と同じく大のお母さんがスリッパはきながら、こっちに向かっている音だろうと、二人は思う。
やがて、扉が開く。
大の母親は驚いた。
『健ちゃん？昭ちゃん？』
昭吾は丁寧にお辞儀する。
『お久しぶりです、おばさん。』
健太も挨拶をする。
『どーも。』
大の母親はまだ驚いている。
おばさんにとって、僕ら（僕と健太）が唐突に訪れたことはそうとうな衝撃だったようだ。嬉しい方でか、悲しい方でかまではわからないが。
『どうしたの？』
昭吾は事情を説明した。
『大が！？わかったわ、どうぞ、いらっしゃい。』
そう言うと、２階の大の部屋まで案内してくれた。
そして、
『楽しんでいってね。』
と言い、ウインクして１階に降りていった。どうやら嬉しい方だったらしい。
昭吾は少し考え、その後、ドアを軽くノックする。すると、中から

『入れ。』
と聞こえたので、二人とも中に入った。

中は予想以上に散らかっていた。足場がないほどに、雑誌や、漫画、プリントやお菓子の袋、などがあり普段どんなに怠惰な生活をしているか、予想できる。机にも、あるのは学生にあるはずの教科書等ではなく、枕が一つあるだけだ。唯一の足場といえば（足場といえるかわからないが）ベットだけだろう。
僕は入ってすぐ絶句していたが、健太は反応していた。
『おまっ、これはねぇだろう。いつも何してんだよ。』
花月はとりあえず座るように促す。
『まあ、適当に座れ。』
『いや、座るとこねぇし。』
僕は大の部屋に来て発した第一声がこれだった。
本当はもっとシリアスでダークな面持ちで訪れるつもりだったのだが。

一通り掃除が済むと、二人は床に座り、花月はベッドに座った。
―さて、何から話すべきか。―
花月はしばらく悩んでいた。

その間、二人はこそこそ話している。
『おい、昭吾、この間は何だ。』
『知るわけないだろ。僕が聞きたいぐらいだ。…余程言いづらいことなんだろうか。』

そして花月の口が開く。

『実は…。』
二人とも息をのむ。

『俺様は…宇宙人なんだ。』（花月）
しばらく沈黙が続き、そして、
『はぁ？』（昭吾）
『あっはっはっはっは。それ、ウケるよ、大。しかもマジ顔で。プッ、ククク。』（健太）
花月は椅子を座り直して真剣な顔つきでこう言う。
『お前ら、この俺様に違和感は感じないか？時乃と比べて。』
『それは…。』（昭吾）
『感じるよ、でも記憶がなくなったからだろ？』（健太）
花月は軽く、溜め息をついた。
『じゃあ、本人と変わってやる。』（花月）
そう言うと、花月は目をつむった。
その瞬間、そこにいる人がさっきいた生物とは別物だと健太と昭吾はすぐにわかった。
なつかしい感じがする。
昭吾は泣いていた。そして
『大、大。』
といいながらも体を揺すった。そんな昭吾に健太はまず、ハンカチを渡す。
『まず、ふけよ。あいつが起きて、俺達がいるだけで驚くだろうに涙なんて流してたらさらにびっくりするだろ。』
昭吾はハンカチを受けとった。
…そして、大の目が、今度は確実に大の目が開いた。本人はあくびをして、きょとん、としていた。
『ここは…家、だよな。何で健太と昭吾がここに？』（時乃）

Mischief Of Destiny～青年（9）

『大、久しぶりだな。』（健太）
『どうして、学校に来なくなったんだ？』（昭吾）
『それは…。』（時乃）

その後、二人は夜の7時まで話して、帰った。そして時乃はどれだけ心配されているのかが、心に染みてわかった。だが、それはさらに時乃を苦しめていた。

二人が帰った後。
『花月、お前だな。』（時乃）
―ああ。―（花月）
『なんで二人を？』（時乃）
―会わせてやりたかった。お前だって、二人に会って、何も感じなかったわけじゃないだろ？―（花月）
『心配なんかされても！！、僕は何もできないんだ。』（時乃）
―何か起こそうと思わなねぇのか？あれだけ心配されても！！！―
明らかに花月の最後の一言には怒りが入っていた。
時乃は、キレた。
『いいだろう、僕の本音をお前にぶちまけてやる。』
―へっ、上等だぁ。―
『僕は！、もう、キモい、にやけている、しんしょう、死ね。これらの言葉を聞きたくないんだよ。あの二人が僕を学校に行かせたいと思っているのなら、こねずみを腹をすかした猫の集団の中にほっぽりだそうと思っているのと同じことなんだよ！！こねずみはどうなる？ずたずただよ。僕も、そうなんだ。』
『僕は、弱い人間だ。すぐくじける。そして傷つきやすく、すぐ壊れる物は貴重なんかじゃない。クズなんだよ。

僕、ほんと、もう死にたい。生きるのに値しない。
死ぬってことは他の全てを犠牲にするってことなんだ。過去、未来、現在。お金、趣味、恋人、兄弟、両親、友達。嬉しいこと、楽しいこと。死にたいってのはそれらを犠牲にしてまで思う、強い想いだ。でも僕は死にたいが死にたくない。自然が好きだから。死にたいのに、死ねないんだ。この辛さもわからないだろう。』
時乃は怒鳴るようにこう言った。

Mischief Of Destiny～青年（10）

そんな時乃の言葉を全て聞いてから、花月ははじめて口を開く。近所にも響くのではないかという程の大声で。
―お前は逃げてるだけだー！！！―
時乃は驚いた。こちらが怒っていたはずなのに、逆にキレられていることに対して。そして初めて花月に畏怖の念を覚えた。…それ程の怒り。そして再び花月の口が開く。
―始まり、終わり、
始まり、終わる。
この永遠の動作の中で
人は何かを得、何かを失う。
失うものの方が大きいということもあるかもしれない。
だが、失い続けるなんて決してない。
お前は又失うことを恐れているだけだ。始まりの地点にさえたっていない。いや、たとうとしていない。

死にたいだぁー？本当に死にたいのならお前の言うとうり死ねばいい。なぜ死なねぇ？それはなぁー、俺様が教えてやる。自然がどーのこーのじゃねぇ！お前には心配してくれる友人が、そして家族がいるじゃねえか。そいつらがお前をギリギリのところでひっぱってんだよ。
勘違いするな？お前は自分の力で生きているんじゃねえ！！生かしてもらってるんだ！恥ずかしいと思え。

そしてなあ、
失うことを怖れるな。
失うことを怖れていれば、いずれ、自分の本当に大切なものを失う。

大事なものを得た時の喜びを知れ。
まずは変わる事だ。先を読めないのは不安でつまらないか？自分の言う通りにならないのはむかつくか？そうじゃない、未来は読めない、だからこそ人生は面白いんだ。その人生を思いどうりにするのがな。それにはいろんな要素が必要だが…。まずは変わることだ。そうやって人は自分を、人を、歴史を、変えていくんだ。
時乃ぉ、お前もそうすればいい。―

『ちぇっ、言いたいことばかり言って。』
―お前と同じだろ―
時乃は電気を消してぽつりと言った。
『学校、行ってみるかな。』
花月は、その一言で…。

沈黙が訪れる。それは永遠の静けさではなく、次の光へと向かう、準備の期間。
そして、時は再び動き出す。

悪魔VS騎士編（1）

見つけた。…見つけた。
悪魔は騎士（ナイト）が倒さないと。
フフフ。
私はナイト。悪魔に姫を奪われ、殺され、……。
ナイトは悪魔を殺す者。
待っていろっ！、
和田、光治！！！

1日目

『いやー、秋だな。もうさみーよ。』（光治）
明と光治が朝、一緒に学校に行くのは、もはや、習慣になっている。
明は両手を息で温めながら、
『秋、…というより、冬のような感じがするよ。僕は。』（明）
と、言いながら上を向く。
『紅葉もあっという間だったね。』（明）
つられて光治も上を向く。明の向いている方向には木が並んでいるが、木に葉は一枚もついておらず、風が枝を少し揺らすばかりだ。
『え～と、あれの影響か？地球温暖化。』（光治）
『う～ん、かもね。』（明）

…そうして、話している内に学校に着き、やがて部会の時間となった。

『寒いな、この頃。』（拓也）
『あはは、光治君もそんなこと言ってたよ。』（明）
拓也はこの上ないくらいショックな表情を見せた。

『あのアホと…。』（拓也）
『誰がアホだ、誰が。』（光治）
『お前以外いない。』（拓也）
拓也は流すつもりだったが、光治が、
『カッチーン、殺す。』（光治）
と、向かって来たので、相手をしてやることにした。
いつものことをいつものように四人が眺めている。
舞は額に手を当てて、
『はぁ…、どうしてあの馬鹿は学習能力がないのかしら。拓也君に勝てる訳ないのに。』（舞）
『そうだよねぇ。』（明）
明も呆れている。
『光明、お前はどう見る？』（広梳）
『あの二人、単純に中がいいだけじゃないかな？』（光明）
光明はいつものスマイルで答えた。
『だよな、やっぱり。光明の方がよくわかってるぜ。』（広梳）
『本当にそうなのかしら。』（舞）

そうして、いつものように談笑して部会は終わった。
異変があったのは帰りの事。光治が一人で暗くなった夜道を歩いていると、道の真ん中に大量のカラスが何かに留まっている。光治は、不思議に思い、近づくと、カラスは一斉にどこかへ飛んで行き、光治はびっくりした拍子に尻餅をついた。
『〜〜てー。何だってんだ。一体？』（光治）
前を見ると、黒いフードを被った人間が光治のすぐ目と鼻の先に立っている。
顔こそ見えなかったが口元だけは電灯と角度の関係で見えた。
そいつはニヤケていた。

悪魔ＶＳ騎士編（２）

光治は不気味に思った。単にニヤケていたからという理由だけでなく、先程カラスが留まっていたのが、そいつだったからだ。
―気味わりぃ―
と、思いながらも、そしらぬ顔して通り過ぎようとしたが、そいつは通りざまに
『気をつけろ、和田、光治。おまえの仲間は全て消える。全て。そして、最後におまえだ。』
ぼそぼそとそう言い残した。光治は後ろを振り向くが、すでにそいつはいなかった。道にはカラスの羽だけが大量に散っていた。

２日目

次の日、明が学校を休んだ。

『明が…こない。』（光治）
部会部屋に一番初めに来て、光治は待っていた。
初めに、舞がきた。
『あれ？今日こそ私が一番だと思ったのに。』（舞）
次に光明、
『みんな、おはよう！…って時間でもないか。』（光明）
大分遅れて、拓也。
『悪い、今日は生徒会のミーティングが…。』（拓也）
続いてすぐ後ろに広梳。
『悪い、今日は生徒会のミーティングが…。』（広梳）
全員がすぐさま反応した。
『うそつけっ！！』

―やはり、明はこない。―（光治）
舞が、光治の顔色を見て、
『どうしたの？あんまり調子が良くないみたいだけど。』（舞）
『実は……。』（光治）
光治は昨日の事をみんなに話した。
『う～ん、心配だね。』（光明）
『確かに。』（舞）
『明のことだ、家で寝てるんじゃないか？』（広梳）
『確かに。じゃあ、明の家に行ってみないか？』（拓也）
『いいわね。』（舞）
光治も実は、明の家に行きたかったのだが、妙な、確信があった。
明は家にいない。と。だいたいメールを返せないほどひどい風邪だとは思えない。
『俺はカラスの奴を捜しに行く。』（光治）
みんなは、会えるかどうかわからない奴を捜すような事はやめろ、と言ったが、無駄だとわかったので、仕方なく、拓也は、妥協した。
『わかった、俺もついて行く。お前一人だと不安だ。』（拓也）
『どーゆー意味だよ。』（光治）
『そのまんまの意味だ。』（拓也）
こうして、光治と拓也はカラスの奴の情報を、舞、広梳、光明は明の家に行く事となった。

光治、拓也はカラスを連れた、（まとった）黒いフードの奴、をキーワードに学校で手当たり次第聞いていった。…そして、
『…つー奴を知らないか？』（光治）
『ああ、クロウの事？』

悪魔ＶＳ騎士編（３）

『クロウ？』（光治）
『知らないの？カラスをまとった？奴でしょ。みんな噂してるよ、気味悪いって。何もして来ないらしいけど、カラスを手なづけているなんて、いるだけで気味悪いよね。』

そして、閉門３０分前に拓也と光治は集合した。辺りももう暗く、学校に人もほとんどいない。
『どうだった？』（拓也）
『いや、クロウと呼ばれている変質者としか。』（光治）
拓也は明らかに嫌そうな顔をした。
『それだけか？』
拓也によると、夜の１２時頃に奴はカラスに餌をやっているらしい。そして最後に拓也は苦笑しながらもこう言い付け加えた。
『あくまで噂だけどな。』（拓也）
『ああ。だが、それでも試してみる価値はある。つーか、それしかもう頼る術がない。』（光治）
『ああ。その通りだ。』（拓也）

学校で光治達と別れてから、舞、広梳、光明は明の家に向かっていた。
『でも明君どうしたんだろう？』（舞）
『だ～か～ら～、風邪だって。』（広梳）
『でも、光治君によると、裁薔君、今まで無遅刻、無欠席だって言ってたよ？風邪の日も無理して来てたって。』（光明）
『う～ん、わからん！』（広梳）

…そして、明の家に着いた。
明の家は決して、学校から近くはなく、電車で２０分の後、歩いて４０分ちょっと、チャリで２０分という距離だ。駅にあるチャリを使うわけにもいかず、（広梳はパクろうとしたが、光明が止めた。）徒歩で行ったので、もう、辺りは暗くなってきている。家の周りは昔、田だったのかと、思わせられるような果樹畑が並んでいた。

明の家に、明はいなかった。母親は酷く困惑しており、まさか、息子が家出したなんて考えたくもない。と言っていた。
結局、明は？と三人で、悩んでいたが、とりあえず、学校に帰って報告することにした。…そして。
『僕はトイレ借りてから行くよ。先、行ってて。』（光明）
舞と広梳は了解し、先に帰ることにした。
その後、光明は駅まで走って行ったが、舞と広梳には会わなかった。学校近くの駅で降りると、もうすでに真っ暗だった。暫く学校に向かって進むと、角を曲がった先に、カラスをまとった、といえるような感じの何かが居た。そして、それはこちらに向かって進んで来る。

悪魔ＶＳ騎士編（４）

暗くて良く見えなかったが、それが前を通り過ぎる時に、
『舞と広梳はもう…いない。』
と、言ったことで、カラスを身に纏い、さらに黒いフードを来た、人だと言うことがわかった。
光明はぞっ、とした。
ただ、ぞっ、とした。
その時、花月が、
―ご主人様よぉ、変わるぜ、いいな！―（花月）
光明の答も聞かずに変わり、黒く、動くものを追い掛けた。追い掛けたが、やけに黒い物体の移動するスピードが速い。花月は奴の直線上を走っており、このままいけば、ぶつかるはずだ。が、…すり抜けた。
―何！？―（花月）
気づけば、カラスが散っていた。目の前に舞うはカラスの羽のみ。
―奴自身は！？―（花月）
花月は家に着いてからわかったことだが、奴だけが、途中で別の道に行ったのだろう、と推測した。
光明は学校に行く気になれず、そのまま帰途した。

ちなみに光治と拓也もその日は疲れて、１２時まで待つ気になれなかったので、明日実行ってことで、帰途に着いた。

『痛っ。』（明）
光明がクロウに会った日の朝のこと。
気がつけば、明は鉄格子のある、牢獄のような場所に放り投げられ

ていた。
今まで気付かなかったところを見ると、何か、眠らされる薬品をかがされたようだ。
閉められた扉の前には見覚えのある、三人がいた。
『何故、お前らが…』（明）
リーダーらしき人物は髭がはえてて、以前とは違うナリをしているが、
『ハッ、獄での生活、てめぇらにも味合わせてやるよ。あの屈辱は忘れたとは言わせねぇぜ。』
確実に見覚えのある顔だった。
『これは復讐でやんす～。』
そしてこの声にも、
『今度こそお前達も終わりです。』
この声にも。
以前の光景をフラッシュバックするように思い出す。
井の頭公園で、先代達の力を借りて確かに全員捕まえたはずだった。
なのに…。
『なぜ、ここにいるっ！！ボス！！』（明）
ボスと呼ばれた男はふんっ、と軽く鼻を鳴らすと、明を見下した顔で見、
『我らが、大ボス、騎士様が脱獄に手を貸してくれたのよ。』（ボス）
『騎士様？』（明）
ボスの隣のチビが、
『偉大なる方でやんす。』（2）
又、チビとは反対のボスの隣にいる男が、
『そう、我らなど足元にも及ばない。』（1）
『まさか…、そんな奴が。』（明）

悪魔VS騎士編（5）

『ま、良かったなあ。あの光治？だっけ？奴以外の奴らが捕まり次第、処刑実行だそうだ。仲間と一緒にいけてなあ。まあ、奴もすぐに追い掛けてくれるだろうよ、ひゃっ、ひゃっ、ひゃっ、ひゃっ、ひゃっ。』（ボス）

そうして、三人組は去って行った。

さすがに、明も絶望の色を隠せず、ただ、立ち尽くしていた。

と、その時。ポケットからバイブがする。バイブはすぐ終わったが、何かと思って手を入れてみると、身に覚えのないケータイがあった。

―なんでこんなものが？―

明がケータイを開くと、メールが届いていたので開いた。

「お前をここから出してやる。私の指示に従え。」

明は明らかに不審に思ったが、今は出来る限りの情報が欲しいので、しかたなく、メールを送り返した。

「お前は誰だ？」

意外にもそれはすぐに返って来た。

「クロウ。」

やり取りをしているうちにわかったのは、住んでいるところから、車で2時間くらいのところに今いる、そして、容易には出られない、ということだった。最後に、

「出るのは明日だ。今日は寝ろ。」

と来たので、大人しく寝ることにした。

3日目

翌日、光明は学校で昨日のことを光治と拓也に話した。

『何だって！舞と広梳が？』（光治）

拓也はすかさず、

『今日は二人とも休みだったのか？』（拓也）
『ああ。』（光治）
光治は驚きよりも怒り、まわりの人など気にせず吠える。
『クソーーーー、何だってんだ。明、舞、広梳は無事なんだろうな！』（光治）
『取り合えず、今日の深夜、学校に集合だ。』（拓也）
光明は戸惑い、しかし、僕は、あまり行きたくない。とは言えなかった。光明はあの不気味な奴にはもう会いたくなかった。
『恐いなら無理して来なくていい。』（拓也）
拓也は光明の顔色を見て心中を察してこう言った。

そして深夜の学校、
光治が学校に行くと、校門前で拓也が待っていた。
拓也は首を学校の方に振る。その先を見ると、学校のグラウンドの中心に黒いモヤモヤがあった。
『クロウだな？』（光治）
拓也はコクッと縦に首を振る。
近付いてみると、やはり、カラスを纏った何者かがいた。
『クロウ！』（光治）
クロウが口を開く。
『何だ、お前らか。』
以前は気付かなかったが、声からすると意外と若い３０、２０、いや、１０代だろう。
『お前が広梳達をさらったんだな？』（拓也）
『そうだ。』

悪魔VS騎士編（6）

光治はクロウに殴りかかろうとしたが、拓也に止められ、
『何が目的だ？彼らは今、どこにいる？無事なのか？』（拓也）
『無事だ。ただ、危うい立場ではある。そして、お前らと話すことはない。』
そういうと、黒い影は遠ざかって行く。途中まではさほど、速くはなかったが、途中から4倍ぐらいのスピードになった。
光治と拓也は追い掛けたが、追って間に合うようなスピードではなかった。

光明はこっそり学校に来ていた。来るのが嫌だったにも関わらず、来たのは、仲間を想う気持ちからである。そして花月に変わってもらっていた。
花月はクロウが逃げる時、スピードが変わるのを見計らって、影とは別の方を追い掛けていた。それは、学校の裏に行った。花月は追い付き、フードの男の胸倉をつかんだ。
『チッ、何しやがる。』
『ガキがオイタしちゃあいけねぇなあ。』（花月）
『言っとくが、それ以上狼藉を働くと、奴らは帰ってこんぞ。』
『チッ。』（花月）
そう言って、花月はドンッ、と突き放した。
『お前は騙せそうにないな。奴らは〇〇にいる。早く助けに行くといい。』
『ああ？お前が…』
花月が言いかけた途端、いつの間にかカラスが回りにかなり集まっていることに気付いた。
―この数は異常だろう。―奴が、
『さらばだ。』

と言った途端に、カラスが花月を取り巻く。急いで抜けると、奴はいなく、カラスの集まりが１０方向に逃げている。花月はひとつのカラスの集まりに追い付き、手をかけたが、霧散していった。それを二、三回繰り返すうちに、カラスは全くいなくなっていた。花月は念話をする。

―チッ、逃げられたか。…で、どーしたい、ご主人？―

―仲間を、助けに行こう。―

―やはりか…。―

花月はしばらく考えた後、

―了ー解。―

渋々、了解した。

―とりあえず、このことを光治君達に…―

―おっとぉ、そいつぁ、言わねぇ方がいいな。―

光明はきょとんとして、

―何で？―

―足手まといだからだ。―

その日、当の本人の舞、広梳達はというと、

囚われの身でありながら、『なんであんたと一緒の部屋なのよ！』（舞）

『知るか！！こっちだっていい迷惑だ。』（広梳）

『だいたいねぇ、女の子一人守れないような…』（舞）

悪魔ＶＳ騎士編（７）

『刃物持ってて、しかもお前を人質にとられた状態で守るもクソもあるか！』（広梳）
ケンカしていた。

その日、明は、クロウの指示を待っていた。鉄格子の小さな窓から外を覗きこむと、ほんのりオレンジ色の光が空を占めている。そして、凶悪な面の人物が二、三人、何かを話している。―ボス達以外にもいる！？、やはり、クロウって奴が言ってたのは本当なのか。脱獄囚５０人がここを見張っている、というのは。―
明は深い溜息をついた。
―クロウという奴は信頼できるだろうか？―
そんなことを思い、学校での事を思いだした。

部会でのこと、部室にはまだ明と光治しか来ていない。
『光治君、もし僕が突然いなくなったら、どうする？』
光治はやっていた宿題から目を離すと、間の抜けた声で、
『は？』
と返す。明はバツの悪そうな顔で
『だ～か～ら、僕がいなくなったら。』
『どうした？突然？』
『いや、僕がいなくなってもこの部は…、光治君達だけでもたぶ友好会を続けてくれるのかな？と、思って。』
『それは…ん？』
部室のドアの外側から何か聞こえる。
『バカッ、開けるな』
『ちょ、待っ…』
『うわぁぁぁ。』

ドアから光明が入って来た。
と、思ったら、舞、広梳、拓也が三者三様の有様を見せていた。ドアが開いて三人とも前にのめり込んでいったのは同じ、そこから、一番前にいた広梳が倒れる寸前に両手をつき、腕立て伏せのような姿勢になり、次に後ろにいた舞は何もできずに倒れ、広梳が潰れ、最後に後ろにいた拓也は右足に重心を置き、なんとか倒れずにすんだ。…が、そこに通りかかった芦来河が舞の上に乗る事で広梳は撃沈した。
ピラミッドの一番下から苦情が来る。
『何しやがる！』
『いや、なんか見てて面白そうだったからまぜてほしいなと思ってね。』
『面白くないっ！』
今度はテノールとソプラノが合わさった苦情がきた。芦来河は足と手を組むと、ニッコリ笑い、口を開いた。
『さてと、で、何の話だい？』

芦来河以外の全員がツッコンだ。
『帰れっ！！』

そして芦来河は帰ってった。

明が疲れた顔で聞く。
『で、何してたの？』
舞の話によると、舞と広梳と拓也が盗み聞きしていたところに、光明が来て、ドアを開けた。三人とも扉に寄りかかっていたので、倒れた、とのことらしい。なお、光明によると何かの遊びだと思ってたようだ。

悪魔ＶＳ騎士編（８）

『盗みぎぎしなくてもよかったのに。』
舞は心配そうな口調で、
『だって明君、転校するんじゃないかって思って。』
広梳は溜め息を吐いた。
『なんかよ～、皆心配するじゃねーか。』
『大丈夫だよ。』
『じゃあ、転校も、どこにもいったりしないんだな？』
『もちろんだよ、拓也君。』
『つーかな、明。』
『何？』
光治は明の両肩に手を置いた。
『お前がいなくなったら、つまんねーよ。』
そう言った光治の顔はどこか切なそうで、それは明にも伝わっていた。
明は恥ずかしそうに下を向いた。
『うん。』
『俺からも一言言わせてもらうが、もし、いなくなるのなら、皆に話せ。』
『拓也君。』
『それにもし、裁薔君がいなくなったら、全力で皆でさがしに行くよ。』
『…。みんな、変なこと言って、ごめん。』
『よーし、皆に心配かけたことと、恥ずかしいこと言わせた罰で今日は明のおごりの焼肉パーティだ。』
『それはないよぉ～。』
ふふ、あの時の出費は痛かったな。とか思いながら、明はいつの間

にか寝入っていた。

明はケータイのバイブの音で目が覚めた。ケータイの時計を見ると２０：００とあった。メールをチェックすると、

「明日までには出られるだろう。」

としか書いておらず、返信しても返事が帰って来なかったので、無力感を感じながら仕方なく寝ることにした。

翌日、拓也は登校途中にフードを被った人を見つけた。

あれは…、クロウ。この前のように逃げられてはかなわないな、気付かれていないうちに捕まえるか。

そして追跡していたが、なかなか隙がない。しかもどんどんと人気のない場所へと進んでいる。とある路地裏の行き止まりでクロウ？が止まった時、拓也は凄まじい悪寒がした。

『しまった、逃げなければ……。』

そこで拓也の意識はぶつりと途切れた。

眠ったように動かない拓也を抱えてクロウ？のもとに来る、一人の男がいた。

『うまい演技でしたぜ、騎士様。』

『いや、さすがだと言いたいのはこちらだ、ボス。』

『ボスなんて、止めてくださいよ、今やあなたが…。』

『ライトクリッシュ、フフ、ただの缶詰めに見えるのだがな。マスクをしないと気絶するとは。』

『あと奴を除いて一人ですぜ。』

『あの変身する坊やだが、消えた。恐らく、助けにくるだろう。裏切り者がいる。まあ、坊やは手強い。捕まえている奴らの場所を変えろ。いい時間稼ぎになる。』

悪魔VS騎士編（9）

『仰せの通りに。』

その日、光治は絶望していた。
部会に誰も来ない。メールを送っても返事がこない。拓也、光明、お前らまでもが…。明、舞、広梳、光明、拓也、どうか無事でいてくれ。
今日、またこの前と同じ時間にクロウに会いに行くことに決めた。
明、舞、広梳、拓也は場所を変えられ、同じ場所に入れられた。

その夜、
光治が学校に行くと、やはり以前と同じく、黒いモヤモヤが校庭の真ん中にいた。　いきなり殴りかかろうとした光治を制止させたのは意外なクロウの一言だった。
『悪かった。』
『はっ？謝らなくていいからよ、仲間を返せよ！無事なんだろうな！！あと一発いや、死ぬまで殴らせろ！！！』
『聞いて欲しい。』
と、言うと、クロウはフードをとった。同時にカラスが散っていく。
中学生くらいのどこにでもいそうな男の子だった。
クロウは話し始めた。
自分の名前が秀だということ、あの時は自分が光治の仲間を捕らえたと言っていたが、実際は別の仲間であること。
『仲間なんだろ？じゃあ、お前も共犯じゃねーか。』
『もう少し、聞いてくれ。』
花月に仲間達の場所を教え、助けるように仕向けたこと。だが、自分の裏切りがばれ、どうやら、場所を変えられたこと。

自分には双子の姉がおり、そいつが今回の主犯だということ。花月に帰ってきたら、このことを話して欲しいとのこと。それと、
『裏切られたと知ってなお、私を利用したいらしい。明日、夜七時に〇〇防波堤にこい、だ、そうだ。仲間の命が欲しかったら、お前一人で、とのことだ。』
『ひとついいか、どうして裏切った。』
『お前の仲間には恨みはないからだ。』
『…俺にはあるのか？』
『わからないか、よーく思い出せ。我ら姉弟はお前に…。』
そういうと、クロウは闇に溶け込んでいった。
『待て、一発殴らせろー。』

翌日、部会に光明がきた。
『ごめん、光治君。勝手な行動とって。クロウに騙されて…。』
『いいんだ。それより…』
光治は昨日、クロウが話したことを光明に話した。
『じゃあ、僕も今日、その防波堤に行くよ。』
『ダメだ！』
光明は何度も頼んだが、光治は一貫して聞き入れなかった。

そして、夜、大雨で、天気は荒れに荒れていた。

悪魔VS騎士編（10）

光治が○○防波堤に行くと、フードを被った奴と、囚人のような奴らがたくさん、それと、明、舞、広梳、拓也がいた。両手を縛られているみたいだ。
フードの奴はフードをとると、こう言った。
『会いたかった。赤色の悪魔！！！』
外見はやはり、クロウと同じく、一、中学生にしか見えない。
『誰だ？お前は？何故ボス達もいる？』
『私は騎士。悪魔を殺すもの。何故？逃がしたからに決まっているだろう？仲間を助けて欲しいのなら、その荒れた海に飛び込め。』
『話を聞くな！光治！』
そう言うやいなや、拓也はボスに腹を殴られ、気絶させられた。
『わかった。』
『ダメだ、光治君。』
『光治！』
『キャー、イヤー。』
明、舞、広梳はそれぞれ叫んだ、が、光治は海に飛び込んだ。
『アッハハハ、これで私の復讐も終わり。姉さま、今、終わったよ。』
そういうと、フードの女は明達を解放するように言い、そして、去って行った。
『光治…。』
舞は両手で顔を覆い、涙をこぼし、
明はただ、絶句し、
広梳は
『あいつらしい最期だったな。』
と、勝手なことをぬかしていた。
そんな、広梳の両肩に後ろから両手がのっかった。

『おい、…ゲホッ、まだ死んじゃいねえ。』
『うわぁ、光治、ナンマイダブ、ナンマイダブ。』
『光治君！』
『光治！』
広梳は聞いた。
『どうやって…。』
『俺様が助けた。』
光治の後ろにはキザなポーズをとっている花月がいた。
『みんなで喜びあってる暇はねぇ、俺様は大丈夫だが、こんなにびしょ濡れじゃあ、風邪ひいちまうぜ。』
花月の一言により、一同解散、ということになった。皆喜んでいたが、一番喜んでいたのは言うまでもない、光治だった。生きてこられたこともそうだが、皆に会えたことに。
そして翌日、部会で話しあった。彼らをどうするか、そして、話し合いの結果、戦うことに決めた。戦って刑務所にいれることに。
行くのは、光治、光明、拓也、そして、芦来河。その晩、クロウに会った。
『待ってたぞ。』
そして、奴らの場所を教えてもらった。ただ、行くのは心の準備もあるので、明後日にした。
そして、翌日、土曜日。

悪魔ＶＳ騎士編（１１）

明はケントに会いにいっていた。
『どうした、いきなり。』
『光治君がまた無茶を…。』
『そうか、そんなことが。お前は光治達を止められなかったことを悔やんでいるのか。』
『いえ、違います。』
『？』
『光治君が無茶をすることを手伝えないことが悔しいんです。』
『ふふっ、そうか。お前も変わったな。信じる、これもお前が彼らの為にできることの一つだと思わないか？』
『信じる…だけですか？』
『信じる、だけだ。だが、お前が彼らの為にできる最大限のことだ。』
『わかりました、信じます。光治君達を。』
『後始末は俺達に任せとけ。』
『はいっ。』

光明は舞に公園に呼び出しをくらっていた。
『行くのね？』
『うん。戦うのは花月、回復役は刹那だけど。』
『これ、持ってって。』
『これは？』
『うん、お守り。何もないよりいいと思って。』
『ありがとう。じゃあ、行くよ。』

拓也は
『明日は、決戦だ。』

筋トレをしている。

広梳は一日中寝ていた。

光治は墨に会いに行っていた。

『明日、大事な日なんだ。』

『うん、それで？』

『き、キスでももらえたらやる気でるんだけど。』

墨はいきなり光治に優しくキスした。

『なっ、不意討ち！今のなしっ！』

『フフッ、頑張って来てね。』

墨は何も知らない。

そして、当日、

敵の本拠地にて。

『よし、行くか。』

『光治君、早速ゾロゾロおいでなすったよ。』

芦来河は棒を取り出すと、構えた。

『光治、ここは俺達に任せろ。』

拓也もカウンターの構えだ。

『俺様一人で十分だっての。だがまあ、しかし、お前らと背中を預けて戦う日がくるとはな。』

花月には構えがない花月がダラッする、それが構えだ。

そして、開戦。

光治は一人、フードの女を探していた。そして、見つけた。ボスとともに。

『なっ、赤色の悪魔。貴様、生きていたのかっ！』

『ここはお任せを。』

光治はボスを一蹴すると、フードの女を捕まえた。

悪魔ＶＳ騎士編（１２）

『なっ、全然役に立たないじゃないか！』
『おい、小娘、説明してもらおうか。』
『いいだろう。』

拓也達のもとへ戻ると、好戦していた。
『我々の負けだ。もう止めろ。』
フードの女は言ったが、囚人達は止まらなかった。そして、１０分もかからなかっただろう。ほとんど、花月の功績だった。
そして、三人が全員倒して静かになってから、フードの女は話し始めた。
『お前、一条って言えばもうわかるだろう。』
光治は悩んだが、わからない。
『一条？』
『まだわからないか！！』
『私と秀、つまりクロウはお前に恨みがある。』
『じゃあ、三年病は！！！』
『三年病！？まさか！』
『そのまさかだ！私の名は幹。一条咲の妹だ！』
『お姉ちゃんは！！…』
最初は力強く、
『お姉ちゃんは…。』
次に出た言葉は泣き崩れそうなほど、か弱かった。
『お前が好きだった！！なんで！？なんでお前なんかに？葬式にだって来なかったくせに！！！なんで最期の手紙が最期の瞬間が、私じゃなくてお前なんだよぉーーーーー！！！！！』
光治は答えられなかった。幹が泣く様を見てるしかなかった。ただぼうっとそこにつっ立ってるだけしかできなかった。他のメンバー

も同じ。

そうして、警察に連絡し、この大きな事件は幕を閉じた。

数日後、光治と、メンバー達は咲の墓の前にいた。

一条　咲。ひとすじ咲く、か。お前はそのまんまだったな。どうせなら、ずっと咲いてほしかったよ。

みんなに今回の事件と咲の事を話した。

墓の前で祈る光治。他のメンバーはそれぞれ何を祈るのだろうか？

これからも、

彼らの前には次々と事件が襲ってくるだろう。でも光治一人では無理でもたぷ友好会なら、きっと、乗り越えることができるはず、きっと。

悪魔ＶＳ騎士編（１２）（後書き）

ようやく、長かった、たぷ友好会も終わりです。今までご愛読していただいた皆様、本当にありがとうございました。
一度に書いてしまった為、早く終らせてしまった感があるものの、完結できて、本当に良かった、と思います。いずれ、また続編を書きたいとおもいます。その時はよろしくお願いします。
次は石と意思についての話を書こうと思ってます。よろしければ覗いてみてやってください。
本当にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1355d/

たぷ友好会

2010年10月14日02時17分発行